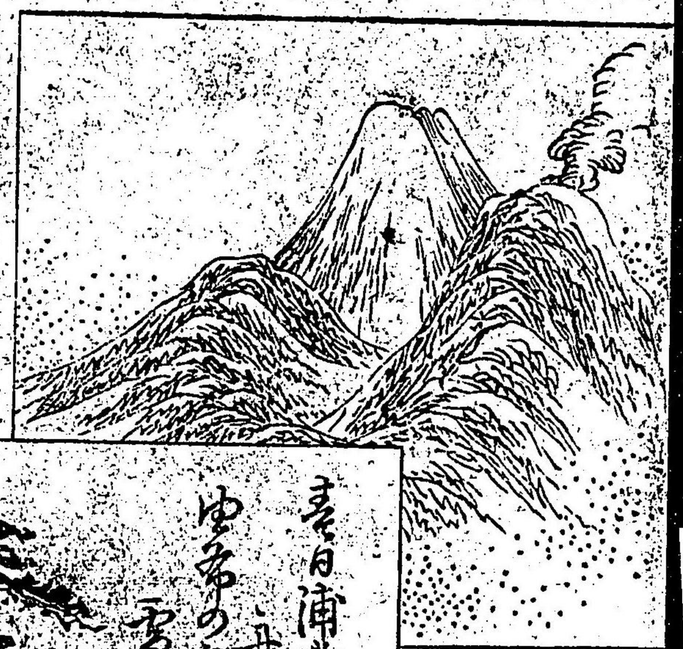
19
288

富士遊覽記

佐藤藏太郎著



藏秀校
士所詠
蓋海雄潤
外客所賞
山水之勝
冠于鎮西

19-288

南豐温泉記自序

我邦之諸州出鑛泉者。其地不爲少矣。如毛之於伊香保。如橋之於有馬。曰齒嶺。曰熱海。其名嘖々干天下而每爲貴人顯客之所輻湊。吁嗟亦盛哉。雖然境土非徧隘則凡景索寞。曾無有以適怡神養體者。是殊爲可憾焉。爲豐之泉場也。以別府濱湧爲之巨擘。雖其餘之小泓。無地而不備山水之勝景。無泉而不奏奇驗之功。使四方遊客。有入仙鄉之想者。是我州之獨有而蓋又所罕干天下也。嗚呼天之幸於我豐也如是。而地之鍾靈者如彼。則身生于其間。職在操觚之任者。寫此勝景。記此偉効。以紹介天下之人士。不除二竪跳梁之

帝國圖書館藏

苦。與煙霞膏肓之患而可哉。及記之成。弁一言。以代序辭。

明治甲午冬十二月於大分日日新聞社樓上

佐藤藏太郎識

南豐温泉記序

今春余探耶馬溪之勝。邂逅綿引東海於中津逆旅。東海盛說別府温泉之爲勝地。時余將往觀沖繩博物會。乃曰歸途出此。一探別府之勝。東海曰。余知湯戸日名子東籬。告之爲子東道。此歲冬至。經佐賀福岡詣別府。東籬掃堂歡迎。乃問温泉諸勝。東籬出示東海所撰十二勝詩。每篇有引。畫工靑石作畫。至爲詳備。次日東籬導探十二勝。先至八幡社。望見鶴見木綿四極諸山。詣崇福寺。寺占爽塏。不特十二勝。瞭如視掌。灣內方二三十里間。皆在一睹間。余因謂別府温泉著古書。不一而足。而大友氏爲國司以來。盛修泉舘。與寺社。殷

爲都會。大友義統謀回復。國內響應。細川黑田二氏兵。覆敗接踵。及孝高。親將來討。始平。此等事。皆可歷舉以供史氏之採者。固非十二勝詩之所能盡也。東籬曰。余友佐藤鶴谷。精史事。嘗慨于此。罔羅遺聞。草南豐溫泉記一卷。極爲完書。余因閱其書。全灣山海邑里。理亂沿革溫泉効能性質。及名流歌詩涉泉事者。無一所遺。別府溫泉有此書。不特可以其游者之探討。可以供史氏之採也。余已嘉此書。東籬曰。鶴谷將付刊。以惠游者。請先生贈弁言。乃次爲序。

明治甲午菰月穀旦於永年泉館

仙臺　鹿門道人千仞撰

南豐溫泉記目次

(一) 緒言　豐後の鑛泉○豐後の地勢○國中の高山大川○阿蘇の火山脈○南豐の風土○溫泉發見の時代○溫泉の記○豐國紀行○其他雜事

(二) 菡萏灣　菡萏灣の形勝○名稱の起元○竹田翁の紀行○浜窓翁の詩○海南村舍○八坂石○周圍の里程菡○兩子山○三浦安良先生○八坂川錦江橋○日出城○日出港○城下蹠○石垣原○高崎山○高崎城○柞原八幡○菡萏港○寶崎の古互市場○春日浦○蓬萊館○春日神社○磯汀の松○蓬萊丘○府內城○松槃山○佐賀の關○速吸日女神社○椎根津彥神社○其他雜事

(三) 瓜生島　沼沒の歲月○周回の里程○歷史○戶數人口○笠結島○其他雜事

(四) 由布嶽　山名別稱○直立山勢○火脈○頂上の石室○由布嶽の圖○其他雜事

(五) 觀海寺　觀海寺の眺望○瀧の舍の記○雜咏○溫泉銘並序

(六) 濱脇　濱脇の名稱○地勢○戶數人口○浴場○上等湯○東西兩泉○清水○濱脇町改良私見○濱脇の物產○其他雜事

(七) 別府　別府の風光○地質及氣候○人口戶數○公共の溫泉場○山海の利便○客舍○永年泉館○遊步の樂○朝見川の翠○流川及雜吟○別府の物產○自別府港至各地海陸里程表

(八) 鑛泉

鑛泉○溫冷二泉○全國の鑛泉○九州の鑛泉○全國鑛泉の種類○速見郡の溫泉○湯治者の注意○溫泉分析表○各泉の泉狀及醫治効用○楠湯○野田の湯○不老の湯○高札の湯○東の湯○西の湯○堀田の湯○觀海寺の湯○上の田の湯○澁の湯○熱の湯○明礬湯○四の湯○柴石湯○金の湯○銀の湯○浴客の心得

(九) 雜記

溫泉の事歷○別府渡脇両地の景勝○江南及華清の故事○耶馬溪○羅漢寺の緣起○羅漢寺の廿四景○頼山陽耶馬溪に遊ぶ事○山國川○宇佐八幡宮○耽堕の滝○三重内山の觀世音○炭燒小五郎の遺跡○田能の千町無田○桐原の老樸樹

全國無比之溫泉場

去明治巳丑の初夏長與專齋氏衛生局長として四國地方より本縣を巡視し歸京の日人に語て曰大分縣に渡り別府濱脇の溫泉場を巡視したるに該場は豫て聞きしより遙に見事なる溫泉場にて全國中恐くは比類なきものなるを發見せり溫泉は其質炭酸泉にして之れに幾分の鐵を含みたるものなれは病氣の種類に依り害を及すことなく總て萬病に宜しく健康體にも適應すと云ふべく殊に土地は海岸に瀕して山海の景色を兼ね且つ鑛泉は數條に別れて近傍の山より地下を傳ひ來り此地に湧出するものなるも幾丈の湯瀧を設るも充分噴出の力あり云々

（明治廿二年六月三日發刊時事新報に據る）

南豐温泉記

豐後佐伯　佐藤藏太郎著

緒言

豐後の鑛泉を出すや由來久矣

山谷谷けて湯の嶽と呼ひ海を稱して硫黄灘と云ふ我が南豐の土鑛泉を湧出するや由來久矣抑も日本の鑛泉に富める比を萬國に見さる所にして火山の數實に百七十二坐の多きに至れり而して中九州及ひ薩摩七島を屬するもの二十六坐鑛泉を出すもの七十餘ヶ所我が南豐の郡部中其の最も多數を占むるものなり現に國中出す所の鑛泉を擧ぐるときは其數殆んど百有餘ヶ所に下らざるなり而して其泉質に至ては硫黄泉あり炭酸泉あり亞兒加里泉あり鐵泉あり塩泉あり凡て鑛泉に有する所の諸性質は概ね之を具せさることなし地勢西海道

豐後の地勢

の東部に位し、南祖母嶽の峻嶺を以て、日向に堺し、西北阿蘇の山脈、並に權現、釋迦ヶ嶽、等の山嶺を以て、肥後及び筑後との堺を限り、東方一帶海に面して、遙かに豫州と相對す、國中に聳もる所の高山には、祖母嶽、傾山、九重山、大船、由布、鶴見、九嶷、熊ヶ嶽、等の諸山あり、河川の大なるものは、大野川を以て第一とし、大分川之に次ぐ、阿蘇の火山脈分走して南豐に入るもの、其東するを九重嶽とし、北に向ふを由布嶽鶴見嶽とし、更に進んで北走するもの、之を両子山とす、此等諸峰の山麓又溪間には各種の鑛泉を涌出するもの甚だ多く、就中由布鶴見の両嶽を以て最も盛んなりとす、即ち別府、濱脇、觀海寺等の諸泉は、皆な其泉脈、此の両嶽に發するものなり、然りと雖とも、由布、両子の両山は、當時熄火山にして現に火煙を噴騰するものは九重、鶴見の二山なり、

因日、豐後國古昔稱して「豐の國」と呼び、豐前國と一國たりしを、後世分て前後二國と爲たるものなり州名紀原曰、豐前上八郡、豐後上八郡、舊事紀作豐國、古事記同之、職原句解曰、按此國在豐日則神鎭座、故

名豐國、風土記取民家豐饒義、元豐國以境界廣爲前後二州也、

小栗布岳曾て豐繪詩史を編み、卷首序するに我が豐の風土を以てす、行文雄拔、序事精密、頗ぶる南豐の形勝を悉せるものあり、因て今左に其文を拔記す、

我豐之地勢、西南率山嶽鬱嵂、其至峻者曰祖母、曰九疊、曰油布、祖母界千肥日、跨千三國、其山脈東北走、崛崎起伏、爲佐伯曰杵諸嶺、至嵯峨關爲御所嶺至海而止矣、九疊南接祖母、北控油布、踞干千嵩萬壑上、占地之高頂、故國內諸川、多發源此山、山之南麓有高陵、屹立熊踞、相傳爲鎭西八郎之城、更南有一巨巖、方可數里、四面絕壁、築城其上者、岡藩也、其山脈縱橫南衝肥後、爲二重嶺、西趨爲玖珠日田之峯巒、巉崿崢嶸、不勝記、油布一名小芙蓉、以形類駿嶽也、滄窓詩所云、未了色從周海見、不孤名與富山聞者、是也、其北面鶴觀岳、東面四極山、背面平家山、三山環

※温泉の發見時代

擁布岳鶴觀從古稱火山、硫礬氣圓結山谷、往々湧出温泉、廻山數十村多設坐湯場、場以百數、如別府港、則濱海汀砂、皆湧硫烟沸々乎常不絶毎戸以賣浴爲業、濱湧村則海潮進退干場内、鹽氣與鐵酸相包合、治病多効驗諺云、別府千軒家無浴盤濱湧一村人無痂患、痂謂積聚龍魔痼子病之類、四極山蟠踞臨海大友義鎭之所城以割據

當國温泉の發見は遠く神代に屬し神武帝東征の時已に之に澡浴し給ふ事を記するものあり（傳へ云神武帝東征の時軍艦早吸水門を過く時に珍彦なる者あり舟を出して帝を迎へ此温泉に浴し給ふ事を勸む帝遂に行幸して浴し給ふ時に玉體健かなる事恰も草葉の露を吐き如し因て此温泉を名けて吐露湯といふ云々）又伊豫國風土記に曰大穴持命見悔耻而宿奈毘古那命欲活而大分速見湯自下樋持度來以宿奈毘古那命而浴濱者暫間有活起居然詠曰眞暫寢哉踐健跡處今在湯中石上也と此等の說に據る時は我が温泉發見の時代は決して後世にあらざること知るべきなり

有馬温泉記に云、此温泉は遠く神代の昔にありて、大己貴命、少彦那命二神、實に之を發見し給ふといふ大己貴命、昔て御身例ならざりし時、少彦那命の勸めよりて、試に此温泉に入浴あらせられしに、奇効神の如く、忽にして平愈ましませり、夫より二神は暫く各地を巡回ありて、醫藥、温泉等を見出し給へるが故に、神代の卷に大己貴命を清湯山主尊、また少彦那命を醫道の開祖と稱し奉る云々見へたり、按するに大、少二尊の温泉に由緒あるや、又據る所無しとせざるなり、

後藤眞守は當國大分郡乙津の人なり、碩田と號す、學識該博、好んで古趾舊跡を探究するを樂みとす、今其の草する所の温泉記文左の如し、

豐後國速見郡の里々に有る温泉は掛まくも恐しき神の御代に大穴持命宿奈毘古那命より有つきしは言もさらなり此は釋日本記及文永年中仙覺律師が萬葉集の抄に伊豫風土記を引たるを見れは温泉郡今の道後のいで湯は大汝少名彦二命豐後國大分速見の温泉を自下樋持度來給ひ伊豫の國に取らしめ給ふと記せるところいちじるしき傳へなりけれはた豐後國風土記にも速見郡の温泉

のたゝへ名とりく、に見へ千年ふる道の乗は其ことゝいつらも古き代の流れに有るなりけり去るに此里なる温泉は分けていさきよく他國の湯とは異にて有りけるもへ諸の瘡何くれとなく病に浴みしてよろしとて春の霞に杖を曳き雪の夕に車もて遊きは都に聞へある人近きは鄙の山賤も年毎にさはに集ひれのもく、みろき浴みして奇すしき湯の効をかゝふり病ひのいたつき拂ひのけてすかたすがすがしく家路に歸るは最もめて度幸なると人みなのよくころ知りつる事なれかゝる効の尊く此上なう奇すしかるは大汝少名毘古那命の御靈のふゆにて青人卿の命助け給ふ藥の道の御祖にしませは温泉の藥にひとしきも此御神の御恵みにそ有ける爰の温泉に浴して病を祓ひ除く人々いつらも此二柱の大神の御恵をめて度きはみとしゝとものの祀ひれろかみいやまひぬへき事なれば今為後人々も是をもめ心しぬへしと願つゝ今年文久二とせといふ年の六月眞守浴みしてかく物しゝを此里人堀何かし傳聞きて碑にろり大神の御名をも記して御恩頼を廣く世に崇知らしめんと坐ろに求めぬるから縮て記す者は豐後國大分郡乙津里後藤眞守

元祿年間（七年）筑前の鴻儒貝原益軒先生、我が豐後に遊び、豐國紀行の著あり、書中温泉に關するの事を記す、當時我が温泉の景狀、及び之が沿革の一班を窺ふに足るものあるを以て、左に其數行を拔記す

別府は石垣村の南に在る町なり民家百軒斗民家の宅中に温泉十所あり何れもきよし庄屋の宅中にあるは殊にいさぎよし凡此地の温泉は他郡に優りてきよく和らかなり家々に多きもへ其館に舍られたる客の外に浴する者なし故に浴數も時刻も客の心に任

せて自由なり他の温泉のかまひすく顯はかしきに似ず傍に懸桶の水ありて是又きよし町中に川あり東へ流る此川に温泉湧出つ其下流に里の男女浴す又海中にも出づ潮干ぬれば浴する者多し鹽温なれば殊によく病を治するといふ凡此邊は東に海ありて東海に向へり府内、鶴、原なともれなし（下略）

此百二十年（著者曰元祿七年より百二十年前は天正十七年なり）前の事なりしが別府の邊大地震して昔ありし別府村悉く海となる昔の別府は今の町の數町東に在り其所今は海となりて其跡もなし昔別府の西に在し温泉今の別府の東の海邊に在り潮干ぬれば潟の内に所々温泉流れ出づ潮湯にて病をよく治すとて入浴するもの多し今の別府は其後新たに立る町なり又昔の別府の北に近き所久光といふ村家數千軒（或は若干軒の誤歟）在しと云是又地震に因て別府と同しく海となり今

はなし（下略）

照る月の影さへさへて湯のもとは冬ともわかぬ景色なりけり

（二）蒿灣

蒿灣の形勢

渺々天に連る周洋の南漫々雲を蔕す豐海の西、文珠、両子の山脈、蜿蜒海に斗出して國東の半嶋北方を擁し、關崎の一角遥かに之れを迎へて南を扼し海水入て一大灣を成すもの之を名けて蒿菖海と云ふ由布、鶴見、四極の諸山は、巍々として其西に聳へ、八坂、朝見、大分、大野の諸川は、混々として其西南より注ぐ、灣の周回凡ろ二十餘里、其西北に在るものを、箕崎、護江、香貫、深江、日出、龜川、石垣の諸町村とし、東南に在るものを、佐賀の關、三佐、荻原、大分、勢家の各市邑とす、沿岸屈曲出入參差、幾多の碧巒は、幾多の青灣と、犬牙鋸齒相接して、其形蓮華の如きを爲すもの、是即ち古來蒿菖灣の稱ある所以なり、一説に、天文中明人阮林（ゲンリン）なる者、海に航し來り

名稱の起元

て臼杵に寓す、屢々此地に遊び、全灣の形勝を愛し、名るに菡萏海の稱を以てしたりと、此說或は信ならんか、昔時、此灣の西南隅に方り、二個の島嶼の峙つものあり、其一を瓜生島と呼び、東西壹里、南北二十町、今一を久光島と稱す、大さ瓜生島の半ばに過ぎず、二島合して一千有餘の住民を有し、四個の神祠と、三個の寺院ありしも、瓜生島は慶長元年閏七月十二日、地震海嘯の爲め、久光島は同三年閏七月廿九日、鶴見嶽破裂の爲め、共に崩潰して海底に沼沒したりと、今一小丘の菡萏港背に竦へて以て、青松其上に茂生するもの、即ち島嶼の一部なりと云ふ、嗚呼造化大功の及ぼす所、其の美を全灣の形勝に加へたるもの、幾層の多きぞ、灣中水靜かにして翠嵐朝に波を渡り、內海風穩にして蒼靄夕に山を抹し、綺光水色と相映する處、片々たる幾多の輕帆は、風を孕で其の間を往來し、點々たる無數の白鷗は、侶を呼て其の面に泛ぶ、風光宛然、一幅の畫圖を觀るが

如く、江湖山水に遊ぶの騷客をして一望直に

豐之山水甲關西第一誇人耶馬溪光景吾憐菡萏曲浮嵐暖翠把詩題。

綿引東海

の句を賦せしむるもの豈偶然ならんや、滿目の景勝は眞に是れ

沙白松青灣又灣峰巒盡處左加關風光不獨豐南勝隔海雲烟是豫山。

上田澹齋

扁舟點々泛青灣日暖風淸景色閑經過輕車三十里雲邊遙指四州山

秦米陽

蓋し、我豐の山水、明媚を以て、關西に鳴るもの、誰か此灣あつて鬱律たる波光巒影の、文士墨客をして、長く眼底に存せしむるものあるが爲なる事を知らざらんや、我友阿部楊齋曾て一詩を賦し予に示すものあり曰く

行樂殊宜碧海隈。平沙一路望悠哉。水連鵬背乾坤闊。雲銜山肩羣鄣開。遠樹烟生飛鳥沒。近灣潮滿釣船回。醉殘衣冷西風外。暮色又催詩思來。

田能村竹田翁の黄築紀行中、此灣の景勝を序するものあり、其文に云

連山回環、南自佐賀關、西至木綿鶴見、紫極諸峰、轉折向北走、二子文珠二嶽、積翠堆青連亙殆二十里、海面如盃、惟東方開折、烟波浩渺、一望無際、所謂硫黄三十六里灘是也、倚舷擧目、使人動再蹈東海之念、

廣瀬淡窓翁久しく府内に遊び、歸期近きに在るの時、一日一の坂より此海灣を望み、悵然懷を賦して曰

一面滄波夕照開。群山倒影碧崔嵬。松隨沙嘴參差出。潮抱淵心宛轉來。暮市無人爭利至。秋原有客賽神回。三旬遊樂今將盡。逢着風光却起哀。

東海道人又温泉（イデユ）の条に記して曰

佐賀の關箕の崎と左右相對峙して灣をなし、左なから鏡面の如く、此距離は海程凡そ十里許り、伊豫の山々は迥かに香渺の中をわけて一髮の青を送り、其風景明媚とやいはん、佳絶とやいはん、筆に載するとも辭に述ぶべくもあらず

岩崎小二郎氏別號を海南と稱す、曾て我縣に知事たり、當時居を寶崎にトし、名けて海南村舍と云ふ、蓋大分町の豪商、長野錦溪の別業なり、屋は丘角に據て菡海に莅み、全灣の景勝一眸に落つ、風光眞に佳なり一識主人公務の餘暇、雅友を會し宴を張る、席上賓主の吟甚だ多し、今其二三首を掲げ、以て水畔光景の一班を窺ふに便す可し、

海南村舍雅集席上賦呈主公二首　上田　澹齋

雅俗何嫌來叩門。風流刺史獨覊軒。盧心能與樵夫話。平氣且兼漁父論。
林外鐘傳山腹寺。沙邊潮湧海南村。公餘訪此閑天地。半日清游也聖恩。
松洲落々與山連。潮嚙白沙雲繞椽。取此風光納胸底。朝嵐暮翠占詩權。

又　宇都宮　遠山

海南村舍別乾坤。水碧沙明松映軒。退食只餘魚酒設。滌除盡日簿書煩。

次芳韻却星　海南村舍　主人

孤村風物寂乾坤。忽覺清光入艸軒。詩酒談論秋半日。因君洗得世途煩。

席上分韻得中字　石橋　雲來

歲月將窮遊未窮。共吟酒綠與燈紅。諸君交誼深而厚。不識斯身是客中。

仝得氣字　海南舍　主人

臨紙推敲不須費。如潮詩思咄嗟沸。醉來耳熱夜色澄。忽覺江山添奇氣。

仝得芳字　關　黃薇

冬晴天氣似春光。此夜村莊興味長。諸君文墨吐香氣。綴作梅前菊後芳。

仝得白字　小野　寛堂

小春偶有遠來客。曳杖相尋明府宅。滿眼風光妨畫圖。喬松翠映汀沙白。

仝得是字　十市　石田

後負寒山前對水。高堂風物冬逾美。三杯名酒一聯詩。酣醉何論非焉是。

仝得清字　中里　耕挑

豐年有象世還平。星月粲然看愈清。夜犬無聲五更過。不妨關醉詠詩行。

別府濱脇觀海寺等の温泉場は皆な此の灣底に方れる陸上に在て或は山腹に據り或は海岸に瀕するものあり大分廳下を距ること三里乃至四里に過ぎず道路平坦にして車馬の往來頻繁を極め腕車を賃せば一時間を出でずして達するを得べし且其線路は山に據り海に沿ひたるを以て滿目の風光恰も畫圖の中を行くが如きの感あり殊に行客をして其最も壯快を覺へしむるものは我が芙蓉峰の影を倒にして水上に浮ぶに在りとす野村藤陰翁曾て此地を過ぎ一首を賦す其詩に云

左邊絶壁右邊海。髣髴薩陀山下過。怪底芙蓉倒涵影。出雲布岳碧嵯峨。

濱脇町を距る數町海中に一個の巨巖あり八疊石と名く其面平夷百人を坐せしむべし春夏の交天晴れ氣爽かなるの日席を設け宴を張るに

最も適したるの好處たり、綿引氏詩あり、左に錄す

春樹迢々幾曲灣。布帆明滅書圖開。海天爲我設虛席。八疊巨巖波捲山。

八疊石一に神樂石と云、蓋古來大旱あるに際し、柞原に神社を牽して行幸を石上に行ひ、樂を奏し以て雨を祈る故に此名稱ありと、一説云昔年別府の人、妓を小舟に載せて此石上に遊び、飲酒娛樂して將に歸らんとし倉皇錨を卷く時に百方力をきはむるも拔けず、中一人あり、金比羅神社の符を出して竹筒に盛り、錘を附して而して底に墜したれば、錨忽ちにして拔く此に於てか力を極めて引揚げたるに錨爪一枯木を鉤て舷まで來る、舟子之を見て甚だ不吉なりとし、槌擊して海底に沈めたるに、小枝の細折せるもの、留つて舟中に落つ之を視れば、皆是れ純然たる珊瑚樹なり、因て翌日再び往て網を投じ之を探りたるも又獲る所なかりしと云ふ

此灣を圍繞せる陸路の里程は大略左の如し

自佐賀關　至坂野市…三里七合　自坂野市　至鶴崎町…一里
自鶴崎町　至高松村…一里　自高松村　至大分町…一里三合
自大分町　至濱之市……八合　自濱之市　至別府町…二里五合
自別府町　至豐岡村…二里七合　自豐岡村　至日出町…一里二合
自日出町　至杵築町…三里三合　自杵築町　至守江村…一里五合

尙全灣周邊を圍繞せる、山河、城市、古趾、舊跡の如きも其記す可きもの甚だ多し今之れが二三の著名なるものを揭ぐれば先づ

(一)　兩子山　(東國東郡)

國東半島に參へたる群山中、奇峯峭然、高く碧空を摩し、嵯峨として雲煙を吞吐するもの、之を名けて兩子山と稱す、海面を拔くこと二千三百五十尺、頂上に登臨すれば、四望空濶極目千里、中國の海、四國の山、歷然として皆眉宇の間にあり、寶曆年間、三浦安貞先生、此山に籠居し、夜々天象を觀、星斗を量り、精密深究、遂に地動説の卓見を立つ、

三浦先生名は晉、字は安貞、國東郡富永村の人なり、村二子山に近し、因て蓬山と號し、又洞仙と號し後園に梅樹あり、因て又梅園處士と號す、寶政元年三月十四日を以て卒す時に年六十七歲なり

(二)　八坂川　(速見郡)

川は源を西鹿鳴越の山間に發し、郡の北部を橫斷して、立石の南を過ぎ、東流倉成に至て久木、日指の細流を合せ、杵築城南、須崎に至り、海に入る、末流に一條の長橋を架し、錦江橋と名く、斜に暮煙を截て虹の斷へざるが如く、高く秋潮を瞰て月の鄉を分つに似たり、北岸を杵築城市とす、人家丘山に櫛比して眺望最も佳なり

(三)　日出城　(速見郡)

日出城日出港　城下鰈

日出城一に暘谷と云、慶長年間細川忠興の築く所、後木下氏世々之に居る、峭壁千尋海に臨て要害頗ぶる險なりと雖とも今は只其墟を存するのみ「千年事往人何在、半夜月明潮自來」日出港は港口南に向ひ廣さ二町七反餘深七間左右暗礁あり港口より北三町東拾町あり巨松百餘株を泊するに足る、此地の名産に鰈魚あり梅雨の候、盛んに漁獲す、其味ひ極て美なり、土俗之を城下鰈と云ふ

(四)　石垣原　(速見郡)

石垣原

豐山行盡見平原、亂石縱橫古塞垣、鐵騎不歸春寂々、杜鵑聲裡弔英魂」是李紫溟が石垣原を經て當年を弔ふの詩なり、空原一望何の見る所ぞ、野鳥烏飛んで春寂々と、古碑字無しい草芊々たり、「霞む日や草にきへこむ浪の音」とは眞に此境の景光を盡せるなり、此地慶長(五年)の昔大友義統黑田孝高と戰ひ其臣吉弘統幸の戰死する處遺恨星霜五百回今尚風雨晦冥夜啾々鬼哭聞ふと云ふ、三浦安貞先生詩あり左に錄す

山圍舊國鬱岩嶢　遺恨空原鐵半銷　鬼哭夜隨風雨起
冤魂秋入海濤驕　分爭朝暮指揮失　割據雄圖形勢遙
烈士墳前停杖立　蒼寒松老草蕭々

(五)　高崎山　(大分郡)

高崎山

高崎山一に四極山と稱す、山勢峻峭、盤紆蟠鬱、頂上に城墟あり、大友氏世々據て以て九州に雄視せし處、世遷り時轉ず六百歲、只今は唯殘月由布の山頭に沒する時曉猿猶に叫んで曙の寂其たるを聞くあるのみ、雄骨朽て奇山寂たる景光は勝闘室翁の詩句以て盡せるを覺ふ

崖鬼四極峯　線路墜猶遠　翡翠巢危岸　猩猴挂古松

高崎城

目勞苔海潤　身躡白雲重　城堞頹崩盡　空餘樵者蹤

高崎城は大友八代氏時のとき延文三年之築きたるなり當時肥後の菊池武光、來り攻んとするを聞き、之を築きて拒守の備を殿にす、後武光と筑前香椎に戰ひ利あらずして退き此城に據る武光來り圍み遂に和を媾ず義統の時に至り天正七年境町より火を失し遂に延燒して復修理を加へず今尚は烽臺の跡山上に存する者あり南方の半腹に柞原八幡社あり、承和三年の勸請にして祀る所は仲哀天皇、應神天皇、神功皇后の御靈なり、殿宇宏壯にして境內幽邃、殊に日暮門の彫刻の如きは精巧人をして驚嘆せしむるもの多し

(六)　菡萏港　(大分郡)

菡萏港

春月海心を照して夜色朦朧たる時蓬窓夢覺めて絲竹の響きを聽くもの是れ菡萏港の眞景同港は明治十五年一月を以て新に築く所の港口なり「万代のいさをやこゝによる千舟」(花の本芹舍)「とこしなに咲くや淡の涙の花」(九春)此等の句皆此港繁榮を祝するものなり

鶴谷日今の菡萏港の南岸より寶崎の一圓大友義鎭の盛時、諸國の商旅大に輻輳して盛んに外國との貿易を行ひたる古互市場たり蓋大友氏の武威西國に振ふに當りてや國內大に治りたるを以て諸州の民亂を我豐後に避くる者多く當時高崎城より府內城に至る迄人家軒を連ねて繁盛他邦に並ぶ者無かりしといふ亦大友氏海外の商船にして筑前博多に來り貿易するものをして怒く我が府內港に來泊せしめたる事あり、又嘗て明の船舶門司の海峽に入る時藝入舟を出して之を要し赤間關に來泊せしめたるを聞き義鎭大に怒て爾後巡艦を西邊の沿海に派遣し外船を候望せしめ以て之を引て我が府內港に來泊せしめたる事あり寶崎の如きは由來重大なる歷史上の由緖ある土地柄と謂ふ可し而して世間今日に之れを云ふ者罕なるは眞に慨嘆の至と謂ふ可きなり

寶崎の古互市場

春日浦
蓬萊館
春日神社磯汀の松蓬萊丘

(七) 春日浦 (大分郡)

一帶の白砂數里に連り、千樹の青松半空を掩ふ、波は磯汀を洗ふて清く、風は楮頭を拂ふて涼し、藻鹽燒く煙の苫家はかけれども淡煙林を罩めて蒼海暮れかんとする時新月天隱て歸帆影白く水禽侶を呼て塒に歸らんとするの際一種の風韻眞に言ふ可らざるものあり樹間一樓の高く聳ゆるものあり之を名けて蓬萊館と云ふ是即ち碩田人士の倶樂部なり

蓬萊館　蓬萊館　入登斯館愁思散　春兮詠花夏納涼
紅葉白雪興可繼　有時道士爲清談　有時粹客聽弦管
風雅或設文人筵　詩酒交結忘年疑　謂其快哉壯士圖
政議討論既長短　謂其優耶群人會　功話名談絕荒誕
君不見會者如此景如彼英山入海永不斷爲道一縣官民樂
渾向此樓四時翫

春日社は貞觀二年國司藤原世數、敕許を得て造營する所なり○磯汀の松は天正十二年荷揚ノ城主竹中重隆の植ゆる所なり○蓬萊丘は仁治三年大友親秀の築く處、丘形龜の如くなるを以て名くと、後慶長六年故あつて之を毀ちたるに正保中日根野吉明再興して碑を建沿革を記せしむ今尚ほ存するもの是なり

春日浦磯松かけに舟寄せて由布の高根の雪を見る哉　鶴谷

(八) 府内城 (大分郡)

府内は舊國府の所在地なり、古昔國皆府あり、國宰之に居り以て一國を鎭撫す、我豐後の國府は始め今の古

城内府
松榮山
佐賀の關
速吸日女神社

國府村に在り建久以降上野原に移し城を築きて府内城と云ふ慶長二年福原道高今の地に改築し更に荷揚城と名く廢藩の後大分縣廳を此に置く

(九) 松榮山 (大分郡)

鹽山脈迴原東北に奔て丘を爲す是松榮山なり大分を距る東一里萩原村の地位に在り丁丑の役官軍戰沒の忠屍を葬る所山中櫻樹あり櫻樹あり春風三月花發くの日霜十月楓染むるの時杖を曳て來り登らば英々たる白雲滿岡を掩ひ燦々たる錦繡一丘に充るを見ん、若其れ眼を放て北方の天を望まば

隣境相連海一方。登高攀目鬱蒼々。碧々沙灘千村尾。歷々帆分蹤蹟行」

の風景一眸の間に落つべし

(十) 佐賀關 (北海部郡)

北海部郡の北、大分郡の東、一角の遠く硫海に突出するもの、之を名日て佐賀の關と云地形恰も瓢の傾くが如く其頭を地藏崎とす伊篠の佐田岬と相對し其距離僅か六里に過ぎず順風の日は一帆頃刻にして達するを得此地上浦に鎭座せる早吸咩神社は最も古き處の社廟たり牧山は牧場にして古來屢々駿馬を出せしとあり鎌倉右府の時有名なる池月は此地に產したるなりと

速吸日女神社と椎根津彥神社は二社共に佐賀關に鎭座せる我南豐屈指の舊社なり社說を按するに速吸日女の神社は文武天皇の大寶元年日向ノ國造創めて社を田笏穗に建立す云々又醍醐天皇の昌泰年中社を曲浦(ワダ)の清地(スガチ)に遷し建つとあり、曲浦は今の上浦にして此處入海をなせり「ワダ」なる語はまがりてまろきをいふなり續日本紀に承和十年九月甲辰豐後國無位早吸咩神授正五位下とあり神代口訣云速吸名門在豐後

椎根津彦神社

速吸女神社也云々と祀る所の神は六座にして即ち磐土命、大直日命、底土命、大綾津日命、赤土命、大土海原命とす○速吸は日本紀纂疏云潮太急則速吸義明矣云々蓋潮流急激にして渦巻き吸ふが如くなるをいふなり名門は瀬なり早吸名門（ナド）とは今の佐賀の闕の乾より巽に至る海原の惣名なり、佐賀は一説に詳なり即ち清きといふの意なりと

椎根津彦神社は佐賀闕下浦に在り土人之を珍彦社又宇津宮社と稱ふ椎根津彦は彦火火出見尊の孫武位起の命の子なり傳云上古神武帝東征の時軍艦速吸の名門に至る時に漁夫あり艇に乘りて至る帝之を招き問て曰汝は誰ぞ曰臣名は珍彦曲浦に釣する者天神の三子來ると聞き迎へ奉るなりと又問て曰汝能我爲めに導きせんや曰導きせんと此に於てか帝之に椎楯末を授け皇艦に率き入れ玉ひ海路の導者とす時に名を椎根津彦と賜ふ後葛城の國造となる云云

（三）瓜生島

沼沒の歳月

此に示すものとは今を距ること二百九十九年（明治廿七年より起算す）前、慶長元年、閏七月十二日、地震海嘯の爲め崩潰して海底に沼沒したる、瓜生島及同三年閏七月廿九日、鶴見山破裂して爲に陷沒したる、久光島の圖也、

周回の里程

按るに瓜生島は、大分郡の北菡萏海中に在て、東西一里、南北二十丁、周回凡三里餘の一孤島にてありしものなり、古昔之を跡部島と稱す、上世大貴己尊、少彦名尊と此島に於て、漁魚し給ひたる神跡あるに因り號けたりといふ、上記（ウエツフミ）の記する所に據れば、鷁鵜草葺不合尊（カガヤフキアヘズノミコト）より以下、七十三代の間、代々の天皇、皇國巡視の時、日向高知穂の大宮、豐國直入の新宮より、出御して此島沖より御船に乘らせ給ひしと、蓋し上世の事遼邈其實を明にする事難しと雖とも、九十六代後醍醐天皇の御宇、建武二年、足利尊氏叛を圖り、新田義貞の爲め、敗て西海に奔るや、當時船を此瓜生嶋惠悅崎に寄せたる事は、史に載せて歴然たる所なりとす而して尚は舊記の錄する所に據れば二島合して一町十有二村住民一千有餘四個の神社と三個の寺院を有し、陷沒の時、遁れ得ずして溺死するもの四百餘名一説に八百七名とす

歴史

戸數人口

笠結島

生石の涙の此方に小島といふあり笠結といふ名をれふせたれとあまりに細ければつかゐし笠結は早く海とゐりしにこそ　脇蹴室

海原となりにしわとのしら波にひかしをしのふ笠結の島

鶴谷曰、笠縫島の稱は高崎山の一名を四極山と稱するより、好事家の名けたるものなるべし、萬葉集卷三に「四極山打越見れば笠縫の島こきかくる棚おし小舟」と咏したる歌あり、然れども此歌は播津の國津路を詠みたるにて我が豐後にはあらず歌枕秋の風覺にも此島を豐後とし後正誤して播津とおしたり、詳しき事は雄界記等に就て見るべし

(四) 由布嶽

山名別稱

碧海天明けて旭日將に昇らんとし、青嵐波を渡て宿霧漸く散せんとする時、煤煙半空に蛟龍を躍らせ、火輪浪を截て我が菡萏の海灣に入るもの、柁樓に立て眼眸を放ち、西南の一天を望觀せよ、皎々たる一朶の玉芙蓉は、高く雲を排して碧落に秀で、脣顏鮮かに爾に對して、其の來たるを迎へるが如きものあるを望む、是れ即ち由布嶽なり、岳は一に豐後富士と稱し又筑紫富士と呼ぶ、速見郡川上村に在海面を拔くこと四千八百五十尺山勢峨々として青霄に聳へ頂上分れて二峯となる其狀恰も芙蓉に仿たり、山巔常に白雲を粘し氷雪盛夏を歷て消することなし、嗚呼

直立及び山勢

火脈

天の我豐に幸ひするや賜ふに此の名山を以てす、海内無比の神泉は元質を此の山脉に得、天下稀有の靈湯は本源を此の山中に發す、東方に峙つものの之を名けて扇小鹿の諸山とす此山往時は活火山にして山巔火焰を噴騰すと雖とも中古變じて熄火山となり、今は絶て焰々の噴出するを見る事なし、俚俗傳云、往昔行脚の僧あり、此山を咏して曰、豐國のゆふ布か岳か富士に似て煙も雲もたゝぬ日そなき」と此に於てか山岳暴かに鳴動して日夜熄まず、人民大に恐れて速かに其鎭止せんことを祈る、僧又此の歌を改めて曰、豐國のゆふ布か岳に富士か似て煙も雲もたゝぬ日そなき」此に於てか鳴動忽ち熄み復し、此等の俗謠固より云ふに足るものなく、只和歌の德は力をも入れずして天地を動かすべくといへる意を誤解して斯る妄談をなしたるに過ぎざる可しと雖とも昔て火煙噴出せし事あるは事實也

頂上の石室

柚富峯在柚富鄕西、此峯頂有石室、其深一十餘丈、高八丈四尺廣三尺餘常有氷凝經夏不解凡柚富鄕、近於此峰、因以爲峰（豐後風土記）

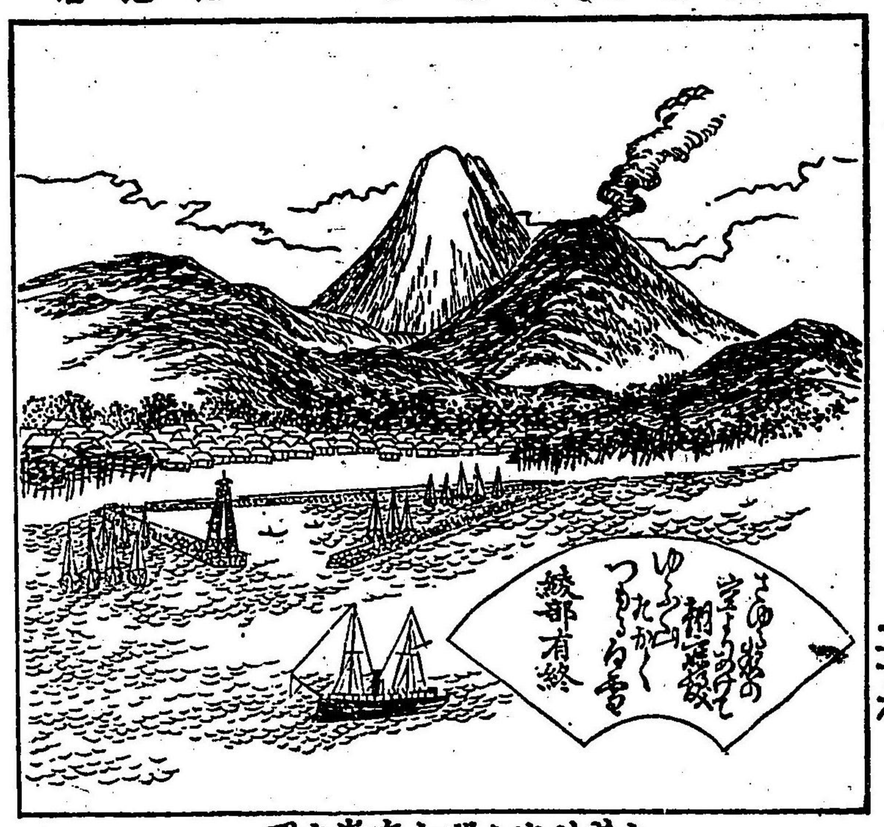
湯の嶽府中の西に在温泉あり俗由布岳と云ふ毎に流出するもの

皆湯なり（三才圖會）

木綿山は豐後國川上村舊嶽本村溫湯村塚原村等の山上に在る大山にして和歌の名所也萬葉集外勅撰歌集に多く出づ（碩田叢史）

由布山

宿霧纔晴油布分北風空翠落紛々路過半腹無青艸天近層



自藍舊海上望由布嶽之圖

機有白雲未了色從周海見不孤名與富山聞同邦每俱佳緣少傾蓋今朝始遇君

廣瀨淡窓

仝

木綿山上白雲封三十六洋呈遠容還訝嶽巒然突兀豐南一望小芙蓉

綿引東海

仝

布山雲霧幾重封海似開前菡萏容三伏雪融應初見排空八朶玉芙蓉

宇都宮遯山

予一歲夏宵、泛孤舟於菡萏海上、時有子規、過霧邊、偶得一絕、

由布山頭月欲低。郡鄰海上杜鵑啼。孤舟一夜流離客。感慨仰天懷故栖。

鶴谷外史

予昔て北豐中津に遊ぶ途古市濱を過ぐ天偶奏商の候に属し
西風木葉を颯して磯汀鼓波起る即歌一首を得たり

もふ岳の嶺の嵐あめにはてふる市濱にさはぐあた波　　鶴谷

(五) 觀海寺

本邦の諸州鑛泉を出すの地一にして足らず、然りと雖ども其土概ね山間窮谷、眺望に富み、風色に秀で、神を養ひ氣を涵ふに適するもの極めて罕なり、上毛伊香保の如き、攝陽有馬の如き、將た函嶺の如き、熱海の如き、其名海内に聞ふと雖とも其境僻遠ならざれば區域概ね狹隘にして長く天下の遊客を樂しましむるに足らず四境開濶山水秀媚併せて眺望の佳絶なるもの特り之を我豐の觀海寺に於て得べし、其他山腹に據ると雖ども境域清絶一望千里、遠きは豫州の諸山を水天髣髴の間に望み隔てゝもなほひつましき心地して

伊豫の湯桁もたとられにけり　　脇蘭室

の懐あらしめ近きは暘谷の城市佐賀の關筑崎地藏崎を左顧右顧の間に眺めて光景恰も畫くが如く朝に見渡せば雲井をひたす早吸の海より出つる朝日かけかも　　仝上

の浩滔活達なる景致を有し夕に立出て見れば汐路の遠かたにあはれをうもる蜑のいさり火　　仝上

の幽寂凄寥なる趣を得更らに寫して氏の詩篇に入るものは

觀海靈場望壯哉。丹霞碧浪接天開。香煙靜遶温泉窟。旭影遙浮凝露臺。
浴詠自同曾點志。賦篇雖逐子虛才。身凭石檻千尋上。月送雲帆萬里回。
起瞻曉星爛。東方海色生。步屧度苔徑。臨登試湯泓。和暖於我適。澄潔何

盈々。灌浴自呼快。消息或倚楹。不知患病宿。正覺身肢輕。松際丹霞抹。漸見群山明」

観海一樓高聳空。暘城箕岬入眸雄。豫山髣髴送遥碧。欄外春輕萬里風

綿引東海

そも此所は鶴見嶽の麓にて山をれひ海を抱き伊豫路を前に望み右は海部大分の郡の浦々左は國東速見の郡の隈々より近くは石垣原を目の下に見ていと晴やかなる所なるを湯は名に高き湯の平にあらび味は甘く色清く萬の病に効あれば四方の人來り集ふこ春秋を以て盛なりとす瀧は始め此湯の元の岸に細き流れを引て落せるを旅衣の雨にそぼち日に曝らして溢きける十年餘にやなりぬらん乙津の蓬蓼居士諸人の爲にとて山岸に石垣を築き其上と下に大なる石のふねを設けて上なるは流れ來る湯をたくはへ下なるは瀧を受けて人々の居なから心のまゝにそゝがるべく巧み石垣頂に穴を穿ち九條の細き瀧を落して常に絶ずそれにかはらぶきの屋根を覆ひ石の柱をつぎて雨をしのぎ日を支へ朽せず傾ふかぬ設をなせばいよ〳〵名に高き湯とはなりにき我か昔來り見し時とは事かはりて舍りの家々も作り改めて山の中ともいはず住なせり此頃は浴みする人皆歸めとて靜かなれば我爲にはいとよき隱家にて瀧のもとの舍りに心をのとかめぬ　（脇岡室翁の瀧の舍の記）此紀は文化四年十月に作らる

観海寺の雜咏　脇蘭室

天地のわのづからなる湯の元に身の病をいさろゝかなむ

眺めやる家路もいづか白雲の我や浮世のほかに住むらん

夕風に野邊の尾花の波よるは海觀る山のしるしなるらん

草枕ふす猪の床も遠からて霜さへわたるあかつきのかせ

さもる夜の枕の上にれもふなりいかに隆積ひみねの白雪

忘れては時雨とろ思ふ瀧津瀬の響をろもる山れろしの風

よもすから夢も結すはすしき妙の枕にひゝく瀧津せの音

鷄もいす鐘も聞ゑぬ山里のほの〳〵白らむしのゝめの空

軒ちきか瀧の響きも日を經れば心をすます友ところなれ

今は更に名殘ろれしき朝よひに馴れて聞にし山の瀧つせ

誰かまた瀧のやとりに詠むらん行衛もかしき山の端の月

観海温泉銘並序

天地間無泉之温者、而其有温者盡客氣也、氣散則寒、復其性也、客氣何

壤中火脈之發也、而其所寓概在名山大麓、水火渾融始成奇驗浴焉者於是乎收其功矣、我南豐多温泉其最瓦者曰湯平、曰觀海、並屬速見郡、而古來兄推湯平予多恙親浴両泉昔人之品信爲不誣而予竊謂觀海亦有難弟視者蓋湯平趾于木綿嶽泉美而甘可稱佳絶矣但其地深窅窮谷盤曲無復遊覽之娛陰晦凄冽動輙釀雨觀海則麓于鶴見嶽而臨内洋罔論於泉之甘美多陵寡雨眺望孔富今擧其略北則甕崎瞿江樓現香貫深江以接暘城支折條達東則鷹島關崎三沙原浦荻原以及府内邐迤參差中間望伊豫碧波萬頃舟帆如織蓋大觀也名稱所由固非偶然矣西南皆山峨々焉巍々焉其最近而低者實相山慶長之役黑田侯所軍、自此以南曠野渺茫所謂石垣原也其裔往々松林如聲稍下則別府人居雁次鱗比凡景勝之奇若畫圖然夫抱痼負痾之徒唯浴是賴而散鬱排悶亦必有須則遊覽之娛豈可少乎哉由是觀之其有光于湯平可知已矧近歳乙津後藤氏修九條瀑以惠浴者儼然爲一名區則推匹之湯平以爲豐中雙泉誰敢非之其他則硫臭酸味地亦或嚣或僻並不得其宜非可同日而語也今茲文化丁卯孟冬予又來浴焉因試作之銘曰

立石之阜　鶴嶽之麓　有瀑可灌　有泉可浴　無遠不來
無疾不適　凋枯春動　頑塊氷釋　孰設斯奇　孰施其德
天地之巧　水火之力

脇蘭室撰

(六)　濱　脇

濱脇の名稱

濱脇は古書濱湧に作る、蓋し海濱温泉湧き出づるの意に取るか（今の東西両泉は往時西町に在しも、湯脉漸く海濱に下り、温泉漸く冷却したるを以て天命二年、改めて湯槽を現今の地位に移せしといふ、尚ほ土叟の言に據れば、今尚ほ海岸に顯するに隨ひ、温度甚だ弱きを加ふと、此等の説に據る時は濱脇の名稱亦た察するに足る可し、）四極山の脉、蜒蜒南より延て邇く市街の後背を擁し、朝見川の一川疊々西より來つて、

地勢

戸數人口

別府との堺界を分つ東北は一帶海に面して、地質高燥、大氣快通、頗ぶる生を養ふに適せり、戸數六百五十九、人口三千百三十八、（明治廿六年十二月末の調査に據る）

距離

大分縣廳を距ること三里弱、豐前より日州に通ずるの國道に沿ひたるを以て車馬の往來最も頻繁に市街頗ぶる殷賑なり、此地二坐の泉湧あり、其東に在るものを弦月池と呼び西に在るものを清華泉と稱ふ、土俗呼で東之温、西之湯といふ、今の浴場は明治七年の改築に係り、其構造共に壯大を極め、數百千の客をして、同時に浴を操らしむるに足る、（明治七年縣令森下景端氏、別府、濱脇兩地人民をして、大に温泉場の改良を圖らしめ、之に要するの費額として、貸與するに金數千圓を以てし、且縣吏帆足通典山田三郎の二名を遣して、工事を監督せしめ、兩地の温泉場をして大に從來の面目を一洗したりと）

上等湯

近時、東西の浴場各一隅を劃して華麗なる別室を設け、以て貴客の來遊に充つるものあり、浴客の最も盛んなるは春秋の二期なり、此時や諸方より來集する者日々幾千を以て數ふるに至り、戸々充たすに客を以てし、家々塡ぐに人を以

てす、而して又海濱の細民船を艤して抵り、船中に起臥して入浴する者あり、其數亦年々數千を下らず、當國の泉場中浴客の多き、實に此地を以て第一とす、今東西兩浴場の景光を擧くれば

東西兩泉

東西兩温泉共に浴泉（ユヽユ）湯及ひ熨泉（ヲチユ）（寢湯とも云ふ）等十數區に分ち、每區其地底中より温泉湧出し、其多寡に從て冷熱の異なるあり、亦其位置海濱に在て地底海水と脉絡を通し、滿潮の時浴場へ侵入するを以て海水の潮汐と、天氣の晴雨とに因り、朝夕冷熱の異るを致し、寒温の度數常に一定し難し、是故に浴客各其體質に從ひ、適宜の温度を撰ひ、入浴すべきものとす、（濱脇温泉分析並醫治効用書）

氣候温度

地勢西南に山を負ひ、東北海に面すと雖ども、泉脈の地底に通ずるを以て氣候頗ふる温和なり、盛夏の候と雖ども、華氏寒暖計九十度に昇る事稀れに、嚴冬の時と雖とも、三十度を下ること少し、恒風は春夏の交、東南

の風多く秋冬は西北の風多し、九夏暑を避けんか菡海月を爇して涼意掬す可く、三冬寒を防がんか布山雪を載せて坐ながらに吟咏すべし、況や船は浪華の艮醞を載せて歸り人は豐海の鮮魚を呼て來たる、豈又海内有數の名域と稱するに足らずとせんや、

豐の海汀にたてる温泉の烟千早振世のしるしなりけり

（豐陽故事談）

遊歩の栞

湯治に此地に在るの客、浴餘散策を試んと欲せば、先つ左に掲ぐる所の諸所を撰べ、

（一）秋葉社（市街の南、花山の麓に在、華表林頭に登る處、暮靄淡く山腰を抹し、鋤犁を擔ふの農夫は田畔を歸り、友を呼ぶの晩食は社頭に入る、好景眞に一幅の畫圖を見るがごとし）

（二）歳神社（長覺寺の西方山腹に在、老樹森鬱として四境を圍み、幽邃閑佳、風致自から愛すべきもの多し）

（三）崇福寺（百尺の磴道高く半空に登へ、梵宮山に沿ふて眺望自ら優あり、境内櫻樹多く花時最も佳あり、）

（四）長覺寺（崇福寺の西隣に在、門外茜藤塚を築く、境内靜寂、一望自ら塵寰と隔絶するもの多きを覺ふ、）

（五）修福寺（市街の西、宇河内に在、一條の清流、山門の前を過ぎて風色自から閑雅幽邃あり、）

（六）魚見臺（南方の海上に聳へたる山上に在、四境開濶、眺望佳絶、幾群の魚隊、波に隨て蔚海に遊ふもの、一望指顧の下にあり、）

（七）燕石（四極山の麓、海に枕める處、一大巨石在、名けて燕石と云ふ、其形恰も玄鳥の立てるが如し、）

（八）錢井戸（迫の溪間に在、潺々として清水湧出づる處、井底錢形を印す、天則らかあるのみ、之を臨めば歴々數ふべし、）

（九）花山（秋葉社の後山を總稱して花山と云、滿山櫻樹花發くの日は、一簇の白雲四邊を照し、風光恰も小吉野の如し、）

（十）金毘羅社（花山の頂上に在、一望茫茫の全灣を脚下に瞰し、絶景眞に云ふ可からざる勝地あり、）

清水

別府の海汀沙を穿て温泉を得、臨濱の山麓井を鑿て清水を得、是れ恰好一對の天賚なるもの、其井は市中西町の南に在、桁の大サ方六尺、深サ二尺餘、水透明にして井底の砂礫數ふべし、水質清烈最も茶を煮るに適し、盛夏冷やかなること氷の如く、嚴冬却て微温を帶ぶ、

此水東西南北より、來り汲む者陸續として日夜絶へずと雖ども未
だ嘗て一回の涸乾したるを見るもの無しと、傍に碑石を建、青桃翁
の吟咏を刻す其句に曰

むすふよりはや齒にひゝく清水哉　芭蕉

百尺青桐。下有寒泉井。分明古鏡中。照見梧桐影。
朝汲水花清。暮汲水花冷。願得遠瀣盃。遠寄蓬山頂。

錄鄭毅夫井詩

濱脇町改良私見

鶴谷日、予往年則府濱脇溫泉改良論數篇を草し、之を當時予主幹たりし某新聞紙上に記載したりしが爾來予が所論にして中幾分の實施あるを見たるは之れ予の私かに喜ふ所なり然り而して今や濱脇町の地勢風土を算するに當り予は偏に該地繁榮の爲め否我が南甦開明の爲め一言以て述べずんばある可からざる所の必要を認めたる者あり因て愚意の存する所を左に開陳すべし

抑も今の濱脇をして直に市區を改め端正なる街路を作らしむるが如きは民度風習の許す所に非らざるを以て吾人は之を今日に望まざるなり只其の改む可きの急にして之を實施する事難事にあらざるものを擇び之を既て而して後漸次全体の改良に及ぼさん事を企望するなり、改む可きの急なるものは何ぞや他無し此の二事なりとす

第一　丘頭の墓地を廢して墳墓を他所に移轉する事

第二　泉上に在る藥師堂を除きて少彦名ノ命の祠を建る事

從來の墓地を廢して新たに之を他に移轉すること固より難事ならずとせず然りと雖とも濱脇全土の衛生を百年に重んじて地方繁榮の基礎を固くせんと欲せば勢ひ今の墓地を廢して之れを他に移さゞる可らず濱脇の人口年々に蕃殖するもの幾千ぞ其戸數亦々に增加するもの幾千ぞ吾人は茲に詳細なる統計表を掲げずと雖とも其の年々歲々戸數人口の增殖するもの決して鮮少にあらざる可きを信ずるなり果して然らば今日山上に散點せる墳墓も其累々滿岡を掩ふに至らんこと數年を出でざるの間にあるべし吾人は啻に眺望佳絶の名城をして空しく屍戸を埋むるの地と爲す事を惜むのみならず其屍戸漸く腐敗するに從ひ一種の物質は漸次地底に浸入して地下の水脈に會し一種の化合物と爲りて清水中に混化し流出するやも又知る可からざる事を恐るゝものなり今試に頂上若くば半腹に墳墓ある山麓に於て穿たれる井水に就き天氣晴朗の日靜に首を斜にして其水面を蔽む時は恰も一種淡然として酸化鐵醫に類したる薄膜の水面を覆ふものあるを認むる事往々にしてあるなり吾人化學を研究せざるを以て是れ其の何の性質たるやを詳らかにする能はずと雖とも斯の如きは決して尋常普通の井水に認めざる所なりとす何れの點より論するも今の時に當り現在の墳墓を他に移して衛生を百年に慮り繁榮を一地方の爲に圖らんこと是れ濱町民たる者の最も正に力むべき急たる事を信するなり

次に泉上の藥師堂を除て他に然る可き地所を擇み大已貫命少彦名ノ命の神祠を造營して之を祀らん事是又該地住民たる者の急務たりとす、抑も理、正に祀らざる可からざる所のものを祀らずして其祀る可からざ

る所のものを祀るは是れ未開時代の事なり、譬へば我が家を興したる元祖を祀らずして縁もゆかりも無き他人の佛を祀らば之を稱して正當の祭祀と云ふを得べきか今濱脇に於て藥師如來を祀り少彦名ノ命を祀らざるは恰も我先祖を祀らずして無縁の佛を祀ると何を以て異る所あるか、藥師如來が濱脇の溫泉を發見して人民に入浴の道を授けしとは何の書にも見ざる所なり、偶ま諸國遊化の行脚僧等が目論見にて我田引水の策略より、遂に藥師如來を勸進したる位ひなるべきに過ぎざる事を信ずるなり、之に反して、少彦名ノ命が大己貴命と共に各所溫泉を發見し玉ひ、諸國を巡視して遍く人民に其の奇効を覩き驗し玉ひし事は我國史にも載せて歴然たる事實なりとす、今日大己貴ノ命を濟湯山主尊、又少彦名ノ命を醫道の開祖としたるもの、豈其の據る處無しとせんや、故に吾人は其祀る可き筈の者を祀らず、祀る可からざるものを祀るが如きは、實に濱脇人民の爲め深く取らざる所なりとす扨又今の藥師堂所在地は、濱脇市街の中央部に位して敷地の如きも之を該地の面積上より論ずる時は、決して小隘なりと云ふ可からず、誠に概要なる上等の地面には相違なしとせども、今此地面に於て神祠佛堂を建るが如きは、甚だ不適當の箇所なりと云はざる可からず、凡そ何物を問はず其之れに適せると適せざるとあり、今該地の如き、市街の中央に在て紅塵百丈なる所神佛を祀るは甚だ清淨を欠くの嫌無き能はず且つ市街の外觀上より將た營業の所得上より全町に及ぼすの利害得失を論ずる時は速かに之を取毀ちて他に然るべき淨域を擇ばざる可からず、又吾人は之を選ずに最も適當なる土地否な場所ある事を知るなり即ち朝見川の末流東西兩泉の裏手に方れる入江中、地理を相して方幾千間の一小島を築き架するに石橋若くは華厦なる木橋を以てし中央に祠宇を造營して二尊を此に祀らんか市街新たに風光明光なる一個の勝域を得ると同時に一方には巨大なる家屋の建築を市街の中央に見ること疑れ豈濱脇の公益なずとせんや人或は臨時費額の多からん事を云ふ者あるべしと雖ども是に得る所を以て彼れに費す所を補ば、收支尚は剩餘あるも其決して不足を見るか如きは決して無かる可き

を信するなり嗚呼勇氣あり公共事業に熱心なる濱脇全土の市民諸氏は幸ひに予が私見を容るや如何

濱脇之物産

○割竹簾　○生姜　○篠竹簾　○鹽の鹽辛　○竹細工
○ひらそ鰯　○鉋屑織　○田作　○芽生姜　○さかしは魚
○櫻苔　○川芋　○煎鰯　○蓮根

二階から魚買ふ客や春の宮

(七) 別府

煙波縹渺たる菡萏灣の西、水盡きて青巒秀で、波洗ふて白沙清き處、埠頭を築き、港口を開き、大廈層樓其岸頭に櫛比し、巨艦大船其港内に碇泊するもの之を名けて別府港と云ふ、明治三年の新築に係り東西百間南北八十間港口東南に朗け滿潮水三間二尺餘峻嶺の南に蟠踞するを四極山とし、曠原の北に綿亘するを石垣原とす、由布の高根は雪を戴て遥かに西方の天際に秀で、鶴見の山嶽は煙を噴て近く西北の半空に聳ゆ白帆歸る處夕陽斜めに波を照らし、墨煙揚

地質及び氣候

る時、旭光一射山に映ず、風光の媚、眺望の佳、我が鎭西の東岸中、何の處にか其比を求めん、加ふるに、塊質高燥にして、大氣爽やかに、季候温和にして、風波穩かなること、殆んど一種の別天地を成すが如く、人をして坐に別府の稱、偶然に出でざる事を知らしむるに足れり、

人口戶數

市街は速見郡に屬して大分縣廳下を距ること三里廿七間、戶數一千餘人口四千六百（明治廿六年末の調査に據れば戶數千百壹戶人口五百廿九）天然の温泉到る處に湧出するを以て、上等の旅館、概ね數泓の泉場を宅内に備へざるはなし、而して左に掲る諸泉は、共に公共の泉場にして、構也るに壯大の浴場を以てす、又客歲初秋、新たに一大泉泓を海岸に設け、名けて靈潮泉と云、浴場の建築大に從來の構造に勝れるものあり、

共公の温泉場

楠湯（市街の中央にあり）　不老の湯（市街の中央にあり）　野田の湯（市街の西田間に在）　不老の湯の西北にあり　高札場の湯

各泉場とも浴池は大抵石を以て疊み泉源は池側或は池底より湧出するも溢れて池側の溝渠に入り新陳代謝する事間斷無きを以て湯中又汚穢の浮游物を停溜することなく透明にして頗る清潔なり

山海の利便

此地陸に在ては豐前より日向に通ずるの國道に沿ひ海に在ては神阪間に往來するの漁船あり、水陸の便、舟車の利、併せ備へて而して天然無比の鑛泉を出す、斯の如きの地世間豈多しとせんや、矢野龍溪先生西游漫記に述て云

山を負ひ海に面して地勢平廣風景亦た佳なり山に遊はんと欲すれば即ち山海に遊ばんと欲すれば則ち海魚肉に富み交通に便あり全國他に斯の如き好浴地あるを知らず大分縣廳所在地を去ること三里餘其間は道路坦夷にして人車を用ひ一時間にして往來す

べし

又東海道綿引泰氏は自著の別府温泉紀事中述て云

浴後の散策醉餘の吟風山に採り水に釣りて茹ふへきの美、食すべきの鮮、唯其意の適する所に從ふべし就中流川の花柳は彼の秦淮の風土を摸出し商女が時謠を唱へて亡國の恨を知らざるが如き、却て遊客の餘興を添へ朝見川の清流に櫻を濯ひ的濱の夕陽に弓張月を邀もるなどゝの風景いと言はんかたなし港口の曉景には數百の船舶朝霞を排して出入するありさま鳧鷗の群かる如く灣上一面に明鏡を拭ふが如く嵯峨の關箕の崎の両眉を揖し泡かに伊豫の諸山は微茫の間より彷彿として蒼鶻の沒する邊より一髮の青を送り來り其他觀海寺の晩眺扇山の暖翠一として明媚ならざるなく實に文人雅客曳杖の鄉にして痼疾を醫し憂鬱を散するの安樂國土とはかゝる所をこそ云ふべけれ云云

客舍

永年泉館

客舍大小七十餘戸あり、其行旅と浴客とを問はず、之を遇すること一般に鄭重を以てす、而して該地旅館中、其高等なるものを擧ぐる時は、先づ記事該館に及ぶものあり、今左に之を拔記して本文を補ふべし

閑閑蕭々乎として徒らに虛勢を街頭に張るものゝ如しと雖ども家屋壯大結構善美庭上には奇樹森鬱として翠綠滴るが如く室内には異香馥郁として大氣蒸するに似たり宏屋を劃して數十室とし番號を附して順次を定む一號二號の両室は廣潔明淨以て大臣華族の車馬を迎ふべく三四より五六號の數室は清壯快濶以て貴顯紳士の狂怒を待つべく其他幽邃にして文人騷客に適するものあり閑靜にして淑女貴婦人に適するものあり輕便にして生徒學生に適するものあり下て平室に至りて田夫野人車夫馬丁に及ぶまで來て快を取り投じて痾を養ふに適せざるものあらざるは無し邸内に湧出する温泉三坐あり其質純良清靜にして殊に慢性の諸病に奇効多し今左に分析表を擧ぐ

各成分	元湯	新湯
硫酸伽留母	〇、〇一七四〇	〇、〇〇四七〇
硫酸加留曼母	〇、〇一三六〇	〇
重炭酸那篤留母	〇、一六四一六	〇、一五九九八
重炭酸亞酸化鉄	〇、〇〇三一八	〇、〇一一七八

格魯兒那篤個母	〇、〇一六四一六	〇、一五六八三
重炭酸加爾叟母	〇、四一四八〇	〇、二九七一〇
重炭酸苦倔涅叟母	〇	〇、二三〇〇四
硅酸	〇、二〇六〇二	〇、一八七三三
硼酸	痕跡	痕跡
鉄土		
燐酸	〇	〇、〇〇二一〇
有機物	痕跡	痕跡
合計		僅少
遊離炭酸	〇、五二五二〇	一、一〇七四七
硫化水素	〇、二一五〇〇	〇、〇二六二〇
	痕跡	〇、〇一九〇〇

元湯は泉質炭酸泉にして性は無色透明稍澁歛性の酸味を有し其反應は酸性にして煮沸すれば亞兒加里性を呈し一「リーテル」中〇、七四二五瓦馬の固形分を含有し千分中より檢出せる各成分及其量前表の如し

新湯は泉質炭酸性含硫泉にして性狀は無色透明硫化水素の臭氣を放ち初め稍酸味にして後收歛し其反應酸性にして煮沸すれば亞兒加里性を呈し一「リーテル」中一、〇〇二五瓦馬の固形分を含有す千分中より檢出せる各成分及其量前表の如し

予常に人に語て曰蘇東坡の賞心十六事中、其十を得るものは、別府の地に於てすべし、而して別府の地、之を永年泉館に於てすべしと十とは何ぞ即ち

(一) 隔溪山寺聞鐘
(二) 暑至臨流濯足
(三) 接客不著衣冠
(四) 柳陰堤畔閒行
(五) 雨後登樓看山
(六) 凉雨竹窓夜話
(七) 清晨半炷名香
(八) 客至汲泉烹茶
(九) 月下東隣吹簫
(十) 撫琴聽者知音

別府沿海、温液湧於潮中、浴客候潮水之退、烘背熨腰、穿沙蒸身、頗妙於痼疾、凡温泉所在之地、所未曾有是其所以爲別府耶

潮退風暄落日斜、海汀一帶也繁華、浴沙人臥半身出、恰似春泥著落花

長梅外

○扼山又控海、別府不虛名、三日南豐酒、温泉始洗醒　富岡耿介
○江村春晝雨濛々、料峭衣寒簾外風、澡浴酒然清徹骨、萬愁消盡一杯中　長與松香
○別府温泉最著名、不塞不沸勝華清、我因抱病親來試、一宿勾留體覺輕　衞鑄生

遊歩の栞

(一) 朝見社（朝見山の半腹に在り久年中大友義直の勧請する處境内數株の櫻花あり土地閑寂にして眺望最も佳也）

(二) 海門寺（海寶山と號す海濱に在り四境圍むに青松を以てすゑ幽邃閑雅自から塵寰と隔離し頗ぶる風外の趣味多し）

(三) 西法寺（北町に在り永昌山と號す境内に假山を築き清泉を引き風色頗ぶる雅致に富めり韻士騷客杖を曳者多し）

(四) 日暮庵（碧松林裏一宇の閑草堂あり雅幽致を極む古と井號す翠嵐檐を繞り赤煙林を一望む）

(五) 七社社（海岸に在り晨には旭日の東溟に昇るを押し夕には明月の波間に浮ふを望む朝暮の眺望頗ぶる佳絶たり）

(六) 的ヶ濱（石垣原の南に在土民傳へ云ふ久壽の昔鎮西八郎爲朝弓を此處に於て演習す因て此の名稱あり）

(七) 音原瀧（鶴見山の麓に傍ひ高さ十二丈白浪若壁に聯ろき銀河翠巒に舞ふ三伏の日杖を曳て來觀すれば暑去る）

(八) 朝見川（源を鶴岳の山間に發し流れて濱脇に至り海に極入る水色清淺底の砂數ふへし夏宵は螢火多く美觀を極む）

温泉は
處々に
あれども
豐後の
別府を
第一とす

帝國讀本卷之七、九州之部

別府村の南。濱脇と別府の谷間に小川あり。淺見川と云。立石村の下に淺見村ある故なり。源は立石より出づ。此川の鰍。冬より春に至りて死せず。冬は其形肥へて味よし。珍らしき物なり。別府に蓼あり。四時穂あり。

朝見川之蓼草
四時叢花紅織々

（貝原先生豐國紀行）

流川

市街の中央に一廓あり流川と云ふ古來文人名殘川の文字を用ひ惆悵惜別の意と爲す竹田翁の詩「或思此地似秦淮」の句あり妓館樓を、駢べ、娼門、甃を、接す、三千の、妓女、粧を擬らして、蘇州、刺史の、腸を、惱ま、し、江州、司馬の、袖を、濕さしむるもの古今同一軌

紅樓粉壁蓋江干幾處芳筵笑語闌誰學黃粱夢中客豪遊一夜小邯鄲　加藤　清泉
絲竹聲々雜嬌歌幷肩侍宴寄秋波不關紅粉樓中鬧夜半溫泉浴月娥　加藤　清泉

街市斜通水一方海棠花發夜風香北樓歌起南樓唾不聽春思孰短長　長　梅外
分手依々未忍行橋頭曉色若爲情東風不使別離絕折盡柳絲還復生　長　梅外

恰過春江花月夜一絃一撥寄想思翠娥不動聲將絕消盡儂魂是此時　田能村竹田
羅列黃金十二釵餘生托跡亦知佳春水綠波橋白板或思此地似秦淮　田能村竹田

樓々呼快組簾中最是流川名不空醉月歌花春若海柳絲吹動雨絲風　紹引　東園
樓上離歌歇江頭歌乃新歸舟回首處猶見倚欄人　廣瀨　淡海
飽かぬ別れの明け烏起きよと啼かにくらしや
歸る車に有明の月と名殘を乘せてゆく

別府の物産

○青縞　○竹釣　○鹽鬚　○紙下　○櫛海　○煎生　○川香　○海烏
○莚針　○簾針　○扇附　○類駄　○類苔　○鰯姜　○芋魚　○參賊

○雨合羽　○煙草入　○竹細工　○篠簾　○芽生姜　○鰹節辛　○金銀細工　○菓子類　○鉋屑織　○ひらめ師下　○鐵醬

自別府港至各地海陸里程一覽

海路		陸路	
至攝津大阪	百卅二里	至熊本縣熊本	卅二里
至仝　神戸	百廿二里	至福岡縣福岡	卅里
至讃岐高松	九拾二里	至佐賀縣佐賀	里
至仝多度津	七拾八里	至長崎縣長崎	里
至備後鞆津	六拾五里	至宮崎縣宮崎	里
至伊豫今治	五拾六里	至鹿島縣鹿島	里
至仝　三津	四拾二里	至下毛郡中津	十六里
至仝　長濱	三拾四里	至	
至仝八幡濱	二拾八里	至	
至仝宇和島	三拾八里	至	
至長門馬關	四拾六里	至	
至安藝廣嶋	五拾里	至	
至日向細島	六拾里	至	
至仝　油津	八拾九里	至	
至縣下臼杵	里	至	
至仝　佐伯	里	至	

上等客舍には自家滞留の浴客に對し「カン〳〵」を据置きて毎日一定の時間を期し客人(先方の隨意たるべし)の量體を測り以て入浴中に於ける身体の健康を明瞭ならしむるの便を與へられたるものなり其方法は即ち左の如き切符を製し置き毎日の體量を記し一週間に及びて輕重の增減を記すものとす即ち第一號は其懸め製し置く處の符にて第二號は記入したるものなり

第一號

月日	記	月日	平均輕重增減	何ノ誰殿
三月三日	十二貫五百五十目	三月八日	十二貫五百六十目	平均輕減
三月四日	十二貫五百四十目	三月九日	十二貫五百七十目	重增……拾目
三月五日	十二貫五百四十目			何ノ誰殿
三月六日	十二貫五百五十目			
三月七日	十二貫五百五十目			
三月八日	十二貫五百五十目			
三月九日	十二貫五百五十目			

上等客舍には自家滞留の客客に對し「カン〳〵」を据置きて毎日一定の時間を期し客人(先方の隨意たるべし)の體量を測り以て入浴中に於ける身体の健康を明瞭ならしむるの便を與へられたきものなり其方法は即ち左の如き切符を與し置き毎日の體量を記し一週間に及びて輕重の增減を記すものとす即ち第一號は其懸め製し置く處の符にて第二號は記入したるものなり

記	第一號
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
月日	貫百日
何ノ誰殿	輕減 重增 平均

記	第二號
三月三日	十二貫五百五十日
三月四日	十二貫五百四十日
三月五日	十二貫五百四十日
三月六日	十二貫五百五十日
三月七日	十二貫五百五十日
三月八日	十二貫五百六十日
三月九日	十二貫五百七十日
平均	十二貫五百五十一匁餘
輕減	
重增……拾日	
何ノ誰殿	

增訂 康熙字典 山田清風增訂 郵代價二圓 稅廿錢 溥葉紙箱 全六冊

同 白紙摺 全十二冊 郵代價二圓廿錢 稅二十錢

圍碁妙傳 井上因碩著全四冊 郵代價廿三錢 稅八錢

双六獨稽古 大原芳藏著全二冊 郵代價十七錢 稅四錢

煎茶仕用集 全二冊 郵代價十七錢 稅四錢

茶湯手引草 全二冊 郵代價十五錢 稅四錢

茶道筌蹄 獄々齋編 全七冊 郵代價六十五錢 稅十錢

生花早學 全十冊 郵代價一圓 稅十四錢

生花早指南 全二冊 郵代價廿錢 稅四錢

日本西洋生花水揚秘法 好村巽編 全一冊 郵代價廿五錢 稅六錢

秋萩帖 小野道風書一帖 郵代價十九錢 稅四錢

古今集 紀貫之書一帖 郵代價十五錢 稅四錢

金比羅參詣名所圖繪 上本六冊 拾八ノ卷 郵代價八十錢 稅十八錢

大日本諸國名所百圖 彩色入四冊 郵代價廿四錢 稅六錢

日本名山圖會 三冊 郵代價四十三錢 稅六錢

雲根志 木内小繁著十八冊 郵代價九十錢 稅廿二錢

唐土名勝圖會 故張霞堂先生遺稿六冊 郵代價一圓五十錢 稅十八錢

同 白紙摺 六冊 郵代價一圓九十錢 稅十二錢

本朝列女傳 黑澤弘忠編十冊 郵代價一圓廿錢 稅十六錢

義經記 八冊 郵代價八十三錢 稅二十錢

有象列仙全傳 王世貞輯 五冊 郵代價八十三錢 稅十八錢

役行者御利生記圖會 六冊 郵代價五十五錢 稅十二錢

五常訓 貝原益軒著五冊 郵代價廿三錢 稅八錢

初學訓 同 五冊 郵代價廿二錢 稅六錢

家道訓 同 二冊 郵代價十七錢 稅四錢

冥加訓 同 三冊 郵代價二十錢 稅六錢

用心たとへ草 附教訓歌詠歌 郵代價四十五錢 稅錢

教訓をしへ草　二冊　松川半山著　五冊　郵代税共十三錢
繪本童子教　同　五冊　郵代税共廿四錢
繪本實語教　同　五冊　郵代税共二十四錢
ひとこと草　四冊　郵代税共二十八錢
百人一首圖會　美本三冊　郵代税共七十五錢
古今假名遣ひ　一冊　郵代税共十三錢
字音假名遣　本居大人著　一冊　郵代税共十九錢
和漢朗詠集　橘千蔭眞蹈　郵代税共十七錢
菅笠日記　本居大人著　二冊　郵代税共廿錢
明治大家發句集　四冊　郵代税共四十二錢
但貳錢郵券御送付アレバ書籍目錄ヲ呈ス
世間猿　和田太郎著　五冊　郵代税共廿六錢
貪着物語　五冊　郵代税共四十三錢
風流茶人氣質　五冊　郵代税共廿八錢
舶來手風琴　一個　二圓卅錢以上各種
獨奏紙腔琴　一個　三圓ヨリ以上各種
バイヨリン　一個　四圓五十錢ヨリ以上各種
ヲルゲット　一個　八圓ヨリ以上各種
池内製風琴　一個　十一圓ヨリ以上各種
簡易輕便寫眞器械　各種
双眼實体鏡　彩色繪付　代三圓八十錢　代九圓
大阪市東區南久寶寺町四丁目　前川善兵衛　同　教育用器械店
賣捌所　大分縣大分町竹町　甲斐治平

鑛泉

鑛泉

泉の地中に在て火脉に觸れ熱して地上に噴出するもの之を名けて温泉と云ひ泉の鑛脉に觸れて之れを溶解せしめ鑛質を含有して流出するもの之を名けて鑛泉と云ふ鑛泉亦温なるものあり冷なるものあり

温泉冷泉

當國出す處の鑛泉中大分郡廻野村及び北海部郡藤河内村字六ケ迫の鑛泉の如きは共に皆冷泉なり（此他當國にて鑛泉の冷なるものを擧くるときは速見郡野原村の神鹽、同郡小武村の凝灰水、玖珠郡四野村の鹽泉、大内泉同郡竹矢村の山鹽及び猪谷村の鹽泉にして冷なるもの多し）

全國の鑛泉

抑も我が日本の如きは全國到る處鑛泉を出さゝるの地罕にして其之に富めるや世界中比を他に見ざる所なりとす而して今其の大略を擧ればは全國の鑛泉を出すもの其數無慮一千有餘箇所にして中最も著名なるもの四百數十箇處あり而して本州に在る者三百餘ケ所四國九州

（八）鑛泉

鑛泉

泉の地中に在て火脉に觸れ熱して地上に噴出するもの之を名けて温泉と云ひ泉の鑛脉に觸れて之れを溶解せしめ鑛質を含有して涌出するもの之を名けて鑛泉と云ふ鑛泉亦温なるものあり冷なるものあり

温泉冷泉

當國出す處の鑛泉中大分郡廻野村及び北海部郡藤河内村字六ケ迫の鑛泉の如きは共に皆冷泉なり（此他當國にて鑛泉の冷なるものを擧ぐるときは速見郡野原村の神樂、同郡小武村の凝刊水、玖珠郡田野村の寒の地獄、西國東郡池部村の年神泉、大分郡谷村の大内泉、同郡竹矢村の山鹽及び猪野村の彌功利清水等以上は皆鑛泉にして冷なるものなり）

全國の鑛泉

抑も我が日本の如きは全國到る處鑛泉を出さゝるの地罕にして其之に富めるや世界中比を他に見ざる所なりとす而して今其の大略を擧れば全國の鑛泉を出すもの其數無慮一千有餘箇所にして中最も著名なるもの四百數十箇處あり而して本州に在る者三百餘ケ所四國九州

同 教育用器械店
甲斐治平

に在る者八十箇所北海道に在る者六十餘ヶ所とす今各地に於ける鑛泉の種類を大別すれば概ね左の如しとす

全國鑛泉の種類

- 硫黄泉
  - 上野の草津
  - 同伊香保
  - 越後の關山
  - 能登の和倉
  - 信州の諏訪
  - 伊豆の熱海
  - 同修善寺
  - 相模の芦湯
  - 加賀の山中
  - 豐後の堀田
  - 伊豫の道後
  - 但馬の湯島
  - 肥後の山鹿
  - 肥前の温泉岳
- �non類及鹽泉
  - 羽後の泥湯
  - 同田澤
  - 下野の鹽原
  - 甲斐の下部
  - 信濃の鹿鹽
  - 相模の箱ノ澤
  - 同堂ヶ島
  - 同宮下
  - 加賀の大熊
  - 攝津の有馬
  - 肥前の小濱
  - 薩摩の指宿
  - 豐後の濱脇
  - 同亀川
- 炭酸泉
  - 肥前の古湯
  - 同嬉野
  - 豐後の別府
  - 出雲の頓原
  - 石見の川合
- 鐵泉
  - 相模の湯本
  - 紀伊の龍神
  - 豐後の鉄輪

全國中炭酸泉及鐵泉を出すの地果して幾干かある有名なる伊香保熱海草津の如き近くば伊豫の道後の如きも其泉質は概ね硫黄泉にして炭酸性を含有するもの甚だ希れなり然り而して我が豐後の如きは啻に炭酸性の鐵泉に富めるのみならず又硫黄泉なり鹽類泉なり將た鐵泉に亜兒加里泉に凡ろ鐵泉の種類として他に有する所一も其欠るものあらざるなり今左に掲る所は單に速見郡に在る所の泉塲なり

湯名	泉質	温度	所在
楠湯	炭酸性單純泉	四十九度〇	速見郡別府町
野田の湯	炭酸性單純泉	五十一度七	仝
不老の湯	炭酸性單純泉	五十六度四	仝
高札の湯	炭酸性單純泉	五十六度七	仝
東の湯	炭酸性食鹽泉	五十三度〇	仝
西の湯	炭酸食鹽泉	四十九度五	仝
堀田の湯	硫黄性單純泉	三十六度五	仝
觀海寺湯	炭酸性單純泉	六十一度七	仝
上田の湯	單純性硫黄泉	四十九度五	仝
澁の湯	鹽類性硫黄泉	四十六度五	仝
熱の湯	炭酸性單純泉	五十三度〇	仝
明礬湯	酸性硫黄泉	八十七度五	仝
四の湯	炭酸性食鹽泉	五十八度〇	仝
柴石湯	炭酸性鐵泉	七十四度〇	仝

金の湯	亞兒加里	泉	八十九度五	全 谷川村
銀の湯	亞兒加里	泉	五十二度〇	全 全村

鑛泉は概して慢性諸病に効ありと雖ども、之れが醫治効用を明らかにし、其適否如何を詳らかにせんずんば却て害を招く事勘しとせず宇都宮健哉氏曾て温泉分析表に序して曰、我縣下各處出冷熱二泉、冷泉姑置焉、温泉或有接近于一處而其性効復然相反者俚俗不察、漫然入浴焉、在體壯神旺者雖無少害疲勞羸得一失二不得無所謂修角殺牛之嘆衞生者豈可恬然傍觀哉と信に然り、蓋從來和漢の醫書、温泉の効用を說くもの極めて罕れなり、唐の陳藏器が本草拾遺に於て始て、温泉の効能を云ふ者ありと雖ども、說く處膚淺以て考證と爲すに足らず、明の李時珍が綱目の說の如きも、只温泉の疾病に効あるを說て、未だ温泉其の物の何たるを說かず、其他張華が博物志の如き、胡仔が漁隱叢話の如き、只漠然温泉の地中より出づるを說て、未だ其の因て來たる所以の理を論ずる者なし、醫書已に斯の如し世間温泉の何たるを解する者鮮きこと、亦異しむに足らんや、今や諸種の學術大に進歩し、温泉の如きも、之れを分析して仔細に其性質を明かにし、成分を詳かにし、醫治効用の如きも、一々之を極めざるもの無きに至りたるを以て、浴者亦修角殺牛の患無しと雖ども、尙ほ左に諸家の說を纂めて世間湯治者の便に供すべし

湯治者の注意

一（イ）凡温泉の功は陽氣を宣通し留痰を化導し肌體をあたゝめ關節を利し經絡を通じ氣血をめぐらし一切の痰血を破り穢痰邪毒を排托し壅滯をめぐらし寒をのぞき濕をさり積聚痼癥ひねはらわきなどの冷痛ひ類腰脚などのだるくしびれいたむ類手足筋骨のひきづりのべかゝみのなひがたき類脚氣うち身くじき一切の傷損下痢、便毒、諸痔、脫肛、淋疾、楊梅瘡毒、結毒、疥癬瘰癧、瘡紫白、癜風並に金瘡

の癒んと欲して癒へかぬる類婦人の血積、痰血、經行、不順の症、帶下腰冷、下部一切の病これらの諸病いづれも温泉によろし

一温泉によろしからざる病は氣血虛損勞倦、不足の諸症もろ〳〵の失血後、津液の乾燥(かはき)たる病人の脾胃虛、勞咳の類はもとより論ずるにをよばず邪熱盛熱ある人には甚だあしゝ病をろへてあやうきにいたるつゝしみて浴すべからず無病たり共生質はなはだ虛弱の人亦浴すべからず

一凡温泉の相應せると相應せざるとをしるは何の病にかゝはらず二三日も入湯して胸ひらき腹すきしきりに能食し食味ます〳〵美なるは湯の相應せるなり若又胸ふさがり腹はり食に味なく肌體ことの外かせ〳〵と枯燥し大便ことの外かたく秘結し或は頭痛甚しく耳鳴まなこくらく眩暈を催し鼻衄を流すはこれ湯の不相應なるなり左樣なるはまづ一両日入湯をやめてとくと保養し再び又試みに一日に両度程かろく入湯して見るべしろの時以前の樣子とちがひよくうへて食味美になりろの外の症もこゝろよき樣に覺へばこれやはり湯の相應せるなり世にれゝくは湯の相應せる症にてありながら入湯の法をしらず滅體無性に欲いりをなし或は酒をのみ不養生をなす徒(ともが)らに右のごとく不相應の症をあらはす事あり故に先つ二三日も湯をやめてとくと保養し其後法の通り試ひべし右の通に試るに以前の通食の風味もいよ〳〵あしく氣分もすぐれざるは決してもひきりすみやかの浴湯を止ひべしかならず大害をまねくこれ湯治人の第一にしるべき事なり又入湯後四五日たちて大便瀉利或は晝夜に二三度或は七八度程すこし裏急後重の氣味ありて大便例よりは臭氣つよきこと

あるものなりこれ湯の相應せるなり大吉事なりかまはずともい
よ〳〵入湯すへし又楊梅瘡下疳の類又は痔脱肛婦人の帶下下部
の病症などの類の病人入湯後四五日たちて毎日下血することあ
るものなりこれ驚くべからず尤ろのくだるにもくだり樣により
て萬一は湯の不相應にてくだる症もあるもへ壺にひたり居など
する徒らありこれ大なるあやまりなり左樣の事もめ〳〵あるべ
からず惣躰温泉といふものは天地自然の理にて陰陽交會し水火
妙合して温泉となるもへにこれに浴してろの氣いつともなく人
の肌體腹藏表裏内外に融通貫徹し膏澤の物を潤すがごとく時雨
の物にろゝぐがごとく融然淡然として自然の陽氣を宣通し鬱を
ひらき滯を通し瘀を排し結を解き關節を利し經絡をめくらし寒
をさり濕を去ることもへに急にばた〳〵と氣をせきて欲いりを

なし或は汗をかくはど長いりをなすは却て害をまねく媒なり故
に浴する時はまづ杓にて湯をしみ湯壺のはたへろゝぎあたゝめ
ろの所に腰をかけ足を湯壺にひたし湯を手にむすびて面をあら
ひ隨分と氣を和し心を平にしろ〳〵と杓に湯をくみて両肩よ
り腹背腰のまはりにろゝぎ何遍ともなくもるやかにかくのこと
くして惣身のはつこりとあたゝまりたる以後靜かに湯壺の内へ
ひたりて惣身にあたゝまり透りたりとれもふ時すなわちあるべ
し一時に久しくひたりたるは元氣もれ津液枯燥し大に毒となる
扨湯よりあがりて風にあたるべからず湯あかりは湯の氣身に徹
して寒を覺へず浴衣ひとつにて久しく座し風寒にやぶらるゝと
多きものなりろのうへ日々の入湯にて表氣ひらけあるもへに湯
あがりならずとも風寒に感しやすきとなればよく〳〵これを慎

むべしかならず畫寐うたゝねをなすべからずもし是非うたゝねをせんとれもはゝとくと夜具を着し屏風をひきまはして臥すべきなり湯浴の内は酒を禁すべし房事は勿論いふにれよはず湯治以後もかならず暫くこれを忌むべし又すき腹に浴す可からず食後早々もよろしからず又氣めくり食すゝむとも大食すべからず生冷の物を食す可らずとくと煮熟したる物ばかり喰ふべしれもき物喰ふべからず性輕き魚鳥少つゝ喰ふべし時々近所へ歩行し氣をめくらし食を消すべし雨天の節は別而雨濕の氣にあたらさる樣に愼むべし著朮の類をたきて不正の邪氣をさくべきなり兎角湯治の内は表氣ひらけて邪氣にあたりよきもへたり朝夕の食事はすこし遲速ありとも時をさだめず唯入湯のためによき樣に空腹にならぬ樣滿腹にならぬ樣に食すべし唐の陳藏器か語にも

入湯後虛憊すへし病にしたがつて藥をあたへれよひ飲食を以て補養すべしといへりこれ肝要の語なり滅體無性に湯に入るばかりにてろの外の飲食身持に養生れろろかなれば却て大害を招く備前の河合章堯といふ人の有馬の記にれよろ湯治の人、温泉をれろろかにれもふもへに養生の節を失ふ四民共にれしむべき時日をついやすのみならず仕官たる身はいとまなき君邊のつとめをかきてこの地に來りながら養生をれろろかにするはあさましき事なり唯温泉を君のことくれもいて病をのろく徳を思ふべしとかけるはさることころかし（ロ）（自イ至ロ温泉考）

本縣の報告に係れる各泉の分析表及び其醫治効用は左の如し

各泉分析成績表（二）（明治廿壹年六月本縣衛生課調査）

	湯	不老の湯	東の湯	西の湯	金の湯
「リーテル」に含有せる固形分	〇、六四八七	〇、八四四七	一、八九九八	一、六四六一	一、四六五八
硫酸加個母	〇、〇〇四五三	〇、〇〇五〇五	〇、〇〇四八八	〇、〇〇三八三	〇、〇六六二二

硫酸加爾曳母		痕跡			
硫酸那篤僧母	〇、〇五三一一	〇、〇五一五五	〇、二八九六八	〇、〇一四四〇	〇、二六〇三〇
格魯兒那篤僧母	〇、〇〇三八一	〇、二二六三三	〇、五三九二七	〇、三七五一五	〇、三四四七一
格魯兒加爾曳母		〇、一四八八五			〇、一〇七六二
重炭酸那篤僧母	〇、一〇三四〇		〇、三三七六一	〇、五三五三三	〇、一九七三六
重炭酸加爾曳母	〇、二四六八九	〇、〇六八〇四	〇、三五八八三	〇、二一五七八	〇、二九〇二四
重炭酸麻偶涅曳母	〇、一九七八三	〇、二二一〇四	〇、一九八八五	〇、三三一一二	〇、〇〇一七二
重炭酸亜酸化鐵	〇、一二一六一	〇、〇三八二七	〇、〇〇五一六	〇、〇二一八一	〇、〇六〇一六
礬土	〇、〇〇二七二	〇、〇五一二二	〇、〇二六四七	〇、〇三六八七	〇、〇三五二〇
硅酸	〇、一八〇四二	〇、一九六二七	〇、二六七一二	〇、二六〇〇〇	〇、二五七一七
硼酸	痕跡	僅微	僅微	痕跡	僅微
燐酸		痕跡			
有機物	僅微		僅微	僅微	痕跡
合計	〇、九〇四三二	一、〇〇六六一	二、〇二七八七	一、六九四二八	一、六二〇七三
遊離炭酸	〇、〇一五〇四	〇、〇〇三三九	〇、〇二三七〇	〇、〇二七一九	〇、〇二七三五

備考　一「リーテル」は我五合五勺〇六撮九六二二に當り、一「瓦馬」は我二分六厘六毛强目あり

各泉分拆成績表（二）（明治廿年七月本縣衛生課調査）

一「リーテル」に含有せる固形分	野田	高札	観海	堀田	上ノ田	濱	熱	明礬	四	柴石	銀
	〇、六七二七	〇、七六二三	〇、三五一〇	〇、三一八二	〇、九五七四	二、三九五二	五、三七三二	三、一六〇八	二、一五六〇	一、五四一八	一、〇二六四
遊離炭酸	多量	多量	少量	少量	僅少	僅微	多量			僅少	僅微
重炭酸石炭	多量	多量	多量	痕跡	痕跡	痕跡	僅微	痕跡	僅微	痕跡	多量
重炭酸苦土	少量	少量	僅微		痕跡	僅微	僅微	僅微	僅微	痕跡	僅微
重炭酸亜酸化鐵	僅少	多量	僅微	痕跡	少量	痕跡	痕跡	著明		僅少	著明
硫酸石灰	痕跡	痕跡	痕跡		痕跡				僅微		僅微
燐酸鐵	痕跡	僅微									
格魯兒化合物	稍少量	少量	僅微	少量	僅微	稍多量	僅僅	少量	多量	稍多量	多量
重炭酸亜兒加里塩類	僅少						僅微				
硫酸塩類		僅微		少量	多量	多量		多量	少量	少量	少量
硅酸塩類	少量	少量	少量	多量		多量	多量	少量	少量		
加留母塩類	僅微	痕跡					僅微	僅微		僅微	
燐酸塩類	痕跡		僅少		僅微	痕跡	痕跡	僅微			
那篤僧母塩類	僅微	僅微	少量	少量		稍少量	少量	僅微	少量	稍多量	少量
石灰塩類	僅微	僅少	少量	稍少量	少量	少量	僅微	少量	少量	稍少量	僅微
苦土塩類	僅少	稍少量	少量	僅微	少量	少量	僅微	僅微	僅微	痕跡	僅微
礬土塩類	僅微	僅少		少量			僅微	僅微	僅微	痕跡	痕跡
重炭酸亜兒加里		僅微									
燐塩類		痕跡									
有機物		僅少	僅微	僅少	僅少	僅微	僅微	僅微	僅少	痕跡	僅少
重炭酸曹達			僅少								
硫化水素				多量	多量	多量		少量			
加里塩類					僅微						
曹達塩類					多量						
硼酸塩類						僅微					痕跡

鐵鹽類							多量	著明			著明	
亞硝酸鹽類							痕跡					
硝酸鹽類									僅微	痕跡		痕跡
重炭酸那篤僧母												多量

各泉の泉狀及ひ醫治効用

楠湯

本泉の性狀は無色透明にして臭氣なく其反應は酸性にして煮沸すれば亞兒加里性を呈し一「リーテル」中〇、六四八七瓦馬の固形分を含有し千分中より撿出せる各成分及び其量は前表掲ぐるか如し

醫治効用は慢性筋及關節僂麻質斯痛風、炎症後の滲出物、神經機能の亢進、神經麻痺、婦人生殖器の慢性諸病、貧血、重病後の恢復期、腺病、膀胱及腎臟慢性炎、疝痛頑癬等に適應す

俗間傳稱の効能は疝積、筋疾等の諸症に宜し、腫物、惡瘡の類は初め此湯に浴し疾根を發表せしめ後不老の湯に浴して根治すと

野田の湯

本泉は楠湯と同質にして其性狀は無色清澄清凉の味ひを有し微に一種の臭氣を帶ぶ

醫治効用亦楠湯に同し

不老の湯

本泉の性狀は無色清澄にして泉面に亞酸化鐵の薄膜を浮ぶ其反應は酸性にして煮沸すれば亞兒加里を呈し一「リーテル」中〇、八四四七瓦馬の固形分を含有し千分中より撿出せる各成分及其量は前表掲ぐるが如し

醫治効用亦楠湯に同し

高札の湯

本泉は楠湯と同質にして其性狀無色清澄微く甘味あり

醫治効用亦楠湯に同し

東の湯

本泉の性狀は帶黄青色半透明にして微に硫化水素の臭氣を放ち其反應は酸性にして煮沸すれば亞兒加里性を呈し一「リーテル」中一、八九九八瓦馬の固形分を含有し、千分中より撿出せる各成分及び其量は前表掲ぐるが如し

醫治効用は慢性及關節僂麻質斯、痛風、炎症後の滲出物、腺病、貧血、重病後の恢復期、喉頭氣管の疾患、脾臓の肥大症、婦人生殖器の諸病、末梢神經機能の亢進、麻痺慢性、濕疹、療疹等に適應す

俗間傳稱の効能は疝癪、筋痛、其他諸症に宜し、腫物は發表せしめ而後全治すと

西の湯

本泉は東の湯と同質にして其性狀は暗黑色半透明なり而して微に硫化水素の臭氣あり

醫治効用亦東湯と同し

堀田の湯

本泉は硫黄性單純泉にして其性狀は無色清澄僅微の浮游物を混合す醫治効用は梅毒、鉛汞中毒、膿疱疹、癢疹、鱗屑疹等に適應すと

俗間傳稱の効用は疥癬腫物等に適應すといふ

觀海寺湯

本泉は炭酸性單純泉にして其性狀無色透明臭氣なし質楠湯と同し醫治効用亦同泉に同しと雖とも殊に地勢に據り肋膜炎後等の恢復患者に適應すと云ふ又内服餘り大量ならざる時は害無きのみならず泌尿及び發汗の作用をなし新陳代謝を促し大に効ありと然りと

上の田の湯

雖とも之れと同時に消化し易き滋養物を用ゐるに非らされば体力の減損すること甚だしきを以て有害の作用を爲すを以て宜しく注意す可きなり

上の田の湯

本泉は單純性硫黄泉にして性狀白濁浮游物を混じ其質堀田の湯と同じ

醫治効用亦同湯に同じ

俗間傳稱の効能は疥癬、腫物に適應すと云ふ

澁の湯

澁の湯

本泉は鹽類性硫黄泉なり其性狀は白濁色不透明にして盛んに硫化水素の臭氣を放つものあり

醫治効用は田の湯に同じ

俗間傳稱の効能は輕微黴毒、疥癬遺毒を發表し、浴するに從ひ、漸々治癒すと云ふ

熱の湯

熱の湯

本泉は炭酸性單純泉にして其性狀は無色淨澄臭氣なく且清涼の味を含み質楠湯と同じ

醫治効用亦同泉と同じ

明礬湯

明礬湯

本泉は酸性硫黄泉にして其性狀白濁色不透明なり泉質上の田の湯と同じ

醫治効用亦同湯に同じ

四ノ湯

四の湯

本泉は炭酸性食鹽泉にして其性狀は無色透明なり其質濱脇の東湯

に同じ

醫治効用亦同湯に同じ

俗間傳稱の効能は疥癬、惡瘡に適應すと云ふ

柴石の湯

本泉は炭酸性の鐵泉にして其性狀は無色透明、稍收澁の鑛味を帶ぶ

醫治効用は貧血、萎黃病、水血病、重病後の恢復期、經閉及び生殖器諸病

神經機能の衰弱等に適應す

俗間傳稱の効用は疥癬、惡瘡、膿潰收斂等にありと云ふ

金の湯

本泉の性狀は無色清澄にして微に一種の鹽味を有し兼て微弱の鹽味を帶び其反應は亞兒加里性にして一「リーテル」中一、四六五八瓦馬の固形分を含有し千分中より撿出せる各成分及其量は前表掲る如

し

醫治効用は腸胃の慢性諸病、泌尿、生殖器、咽喉氣管の諸病、腺病皮膚諸病、慢性麻痹等に適應す

俗間傳稱の効能は疝癪、風積、痰喘、心腹痛、留飲、小瘡等を癒すにありと

銀の湯

本泉は金の湯と同質にして其性狀は無色清澄微に硫化水素の臭氣あり

醫治効用亦金の湯と同し

浴客心得の箇條

一遠來の患者疲勞したる時は暫時休息し然る後入浴すべし決して頓に入浴す可かず

一最初の一週間は一日二回爾後は三回とし入浴は十分間より二十分間を過す可かず

一虚弱なる患者及び老人小兒等は初めより數回入浴すべからず又長浴すべからず

一入浴中はある可く靜にすへし大聲又は湯中を潛る可らず
一飲食後及空腹なる時疲勞したる時等は直に入浴す可らず
一湯治中は大酒暴飲を慎み又飲食後は必す散歩して直に臥床に就く可らず
一風雨寒冷の節は入浴後濡衣にて外邪に觸るべからず
一惡寒發熱頭痛又は眩暈等ある時は快癒を待て入浴すへし
一湯治中は男女とも房事を禁すべし但妊娠を求むる者は格別なれとも決して猥りに交接す可らず
一入浴の前は鹽め湯あみして身体を温む可し
一子宮病ある婦人は成る可く下腹を冷ぬ樣布を纏て浴す可し
一入浴したる後濕りたる浴衣は速に脱替身体に濕氣を受けざる樣なす可し
一入浴後發汗するとも衣服を脱して邪氣に觸る可らす
一固有持病發生するの氣味ある時は決して入浴す可らず
一種々の病症に因て入浴の効害あれば尚醫師に聞きたる上湯治す可し決して叨りに入浴す可らず

雜記

温泉記を編て温泉場の事を序す、之か沿革を述へ、之か歴史を記す、固當然のみ、苟も斯の温泉場に遊んで、温泉の繰て起る所以を知らす、其沿革歴史を知らざるは、猶は堂に上て室に入らざるが如きの憾無とせず、世間温泉の事を記すの書、乏しからず、然りと雖とも、其書概ね純然たる分析表にあらざれば、嚼臘無味、以て浴客臥遊の具と爲すに足るもの甚だ罕なり、予常に之れを憾むや久矣、本編の如き、首に我が豐國の風土一班を記し、次に山水の景狀を述べ、以て鑛泉地の事に及ぼすもの、又所以無しとせざるなり、今左に掲る所のものは、古來我が温泉に關して傳ふる所の諸說中、其最も著しきものなり、中或は歳次の如何を詳かにし難きもの無きに非らずと雖とも、概ね古昔の記する所に據らざるはなし、看者諒焉、

著者識

十二代　景行天皇の御宇、國造、宇那手宿禰足飛なる者、此温泉に浴し、同十八年帝筑紫に巡獵の時、皇子豐門別命をして、大分の君祖とし、此國に貽給ひ、温泉の修理を加へしめ給ふ、

廿二代　仁賢天皇御宇、砥波仙人鹿仙女と云ふ者、二人來て此温泉に浴

す、一説に日子泊瀬邊なる者、秘訣を砥波仙人に得て、豐後に處々温泉を創ひと見へたり

廿五代　武烈天皇の御宇、泊瀬部彦なる者、來て大に温泉を修理し、以て諸人の病苦を救ふと　（豐陽故事談）

三十代　敏達天皇の御宇、橘豐日皇子、來て此温泉に浴し給ふ、時に一首の吟詠あり、歌之を略す　（本朝皇胤紹運錄）

四十八代　稱德天皇の御宇、天平神護二年、大神田麿豐後の國司となり、諸所の温泉に修理を加へ、大に國民を撫育したりと　（豐後風土）

五十代　桓武天皇の御宇、延暦十四年、釋の善珠なる者、遊化して豐後に來り、速見郡に入り里俗を教化す、時に神武天皇行幸し給ひ、又用明天皇潛龍の日、入浴し給ひたる、由緒ある温泉の、歲月倏遠にして或は興り、或は衰へ、湯槽朽腐して已に廢絕に及ばんとするを見て大に歎息し、土叟に議して更に醫王藥師如來の堂を營み、以て温泉の守護となす、同廿三年藤原葛麿、此温泉に來り浴し、病癒へて歸るの後、有司に屬して温泉に修補を加へしむ、仁壽より貞觀、仁和の頃まで、當國屢〻地殊あり、就中貞觀九年の地震の如き、鶴見山崩潰し、温泉並に藥師堂の如きも、悉く破壞して、蹤跡を知る者無に至りたり、　（豐陽故事談）

六十一代　朱雀天皇の御宇、天慶六年、比叡山の僧、淨藏貴所、行化のみぎり藥師堂を中興し、赤野山の麓に建立す、

六十九代　後朱雀天皇の御宇、寛德元年三月親仁親王、此温泉に入浴し給ふ時御歌あり「つらかりしやまふにかはる柴の庵心つくしに日をれくりけり」親王は此年秋に至て還御あらせらる　（豐陽故事談）

七十六代　近衛天皇の御宇、久壽二年七月洪水あり、此時温泉の崩潰するもの甚だ多し、時に鎭西八郎爲朝、來て當國に在り、温泉の荒廢に屬し

たるを修理す、建久七年大友氏、豐後の國司となるや、神社佛閣及び此温泉を修理す、是より先建久三年、仁田四郎忠常、梶原平三景高、頼朝將軍の命を奉じ、肥後國阿蘇大宮司の許に、山獵の古實を質問の爲め下向せり、當時此温泉に浴し湯女に戯れて船中の鬱を慰めしといふ、貞治四年、大友修理大夫親世、大に藥師堂を興し、不盲正受禪師を請して住持とす、此に於てか眞井千津留、久光登志雄、長井茂手喜、山田渡見等に命じて温泉の湯槽を擴め、大に湯治者の便を圖らしむ、大永年中大友左衛門督義鎮、此地に來て湯治中、父義鑑、家臣田口石見、津久見美作等の爲め、弑せられたる報至りしかば、義鎮大に驚きしも、身此地に在しを以て、其害を免かれたり云々　（豐陽故事談）

百六代　後陽成天皇の御宇、慶長元年閏七月、大に地震し、爲めに泉場頽廢し、同三年七月洪水の爲め、山潰れ多く、久光島陷沒せり、此地災に因て

藥師堂、並に温泉場は悉く其所在を失ふに至りたり、其後温泉の湧出に付、村民力を戮て大に力め、遂に舊趾を踪索して湯槽を修し、漸く舊に復したりと、又延寶年中、荒金某海濱の砂石を穿て少彦名の祠、並に藥師の石像を堀出し、之を温泉場の傍に安置したりと、此時世尙は淳に、人朴にして專ら質素を旨とし、浴室の如きも、竹瓦松柱僅かに、風雨を覆ふに過ぎざれば、浴客の如きも、其不便云ふ可からざるもの多かりしを、明治七年に至り、官民協力、遂に一大改良を圖つて以て今日の盛榮を觀るに至りしと云ふ

別府、濱脇両地の景勝たる、滿目の風光殆んど畫圖を觀るが如くならざるはなし、今其の二三を略記せんか

（一）斜陽西に沒して輕帆歸る處、暮靄磯松を罩めて鐘聲を聞く。

（二）驟雨倏ち晴て白雲半ば山を掩ふ處、翠壁一條の懸河を見る。

(三)野廟人無ふして香爐冷なる處。疎柳風來つて落葉婆娑たり。
(四)溪流合する處一杠高く見れ。篁林盡るの邊茅屋三四を見る。
(五)細雨濛々として煙霧四邊を鎖時。杜鵑一聲啼て屋頭を過ぐ。
(六)四極の歸雲雨を載て階前の梧桐に滴時。閑室獨黃昏に座す。
(七)芙蓉峰雲霽れ海天朗なるの日。閑人一葦を泛へて白鷗に伴ふ。
(八)旭日天に朝して碧海平かなる處。水平線上墨烟の靉を見る。
(九)奇巖谿澗に横つて秋水激する處。寒聲月を碎て下流に送る。
(十)絲竹聲絶へて夜色闌はなる時。春月煙を罩めて泉泓に浮ぶ。
(十一)青山春晩れて子規雨に叫ぶ時。杜若花發て野水湛ゆ。
(十二)桃花水に臨みて影映する處。香魚隊を作して春流を下る。
(十三)明月天に懸て鮮光波を照す處。一痕の山色水を隔てゝ青し。
(十四)疎林寂寞として落葉墳塋を埋る處。荆蘇叢裡巧婦鳥飛ぶ。
(十五)陰雲雨を粘して山路人無きの處。暮鐘聲裡落花を見る。
(十六)春雨霽て東風のどかなる處。新燕泥土を啣みて人家に入る。
(十七)山莊秋老ひて柴扉深く鎖す處。遞丁郵書を齎らして到る。
(十八)數棟の茅舍谿流に臨む處。一樹の梅花水を照らして清し。
(十九)寒月天に懸て峯巒聳ゆる處。猿子霜に叫んで客愁を惹く。
(二十)雪は山野を埋めて乾坤靜かなる處。地底春を送て暖烟浮ぶ。

江南及び華清の故事

別府を稱して一に江南と呼び、濱脇の西の湯、揭るに清華泉と題せる扁額を以てす、是れ何人の名けたるを知らずと雖ども江南と呼び、清華と稱す、其因て來たる所以のもの、誰か左の詩句に出でたるを解せざらんや、

行盡江南數十程。曉風殘月入華清。朝元閣上西風急。都入長楊作雨聲

此詩を作る者は宗の杜常なり、蓋し玄宗神仙の事に惑ひ秦皇漢武と同しく遺迹荒涼後人感慨の具たらしめたるを譏りたるなり、華清は温泉宮の名、太宗之を築き後、玄宗の改めて名る處、朝元閣は長生殿と並び立つの高閣なり、噫吁驪山の下天此の神泉を賜ふ而かも資て生を衛り、神を養ふの用に供するを知らず晏主徒らに獸慾を恣にするの場と爲し遂に國家に亡ふの因と爲す豈歎す可き哉

以上掲る處は只近傍の景光に過ぎず、若其れ健脚草鞋を穿ち、或は輕車を買ふて勝を遠遊に探らんか、

耶馬溪の形勝

(一) 山陽翁が、海内第一の勝區なりと、歎賞したる耶馬溪の名域は、西の方十六里を距てたる、下毛郡上津村に在、

鐘山は彦山の支脈にて郡の(下毛郡)西邊中摩草本踏村の北方に峙ち山巒東向山國川と並馳蜿蜒し郡の中央に至て蹲く之を耶馬溪の脈とす

山國川は彦山に發し東南に流れて宇寶に至り東北に轉じ宮園に來て北向し柿原に至て山移川に會し河原の細流を容れ替木に至て跡田川を合し樋田を過ぎ屋形川を引き北流して上毛下毛を隔斷し中津の西に來て岐流海に入る然して替木以南の川脈數里の間群山水を夾て横竦し石水を嫉んで虎居し水之に激し濺珠璣を飛し奇峯肩を聳かして笑ひ矮木龍鱗又蹙が如し巨巖途に當て横嵋し行路を遮斷する者は壁道を通し其稍長きものは窓を穿て明を取り山容樹色變幻奥態文人騷士の詠歸する處紹子曾海内第一の勝區と號す亦誣言にあらざるかり支峯替木より東に連亘して羅漢寺と爲る (大分縣地誌略)

羅漢寺の緣起

羅漢寺緣起

抑書閣峰山羅漢寺は海西の名山にして最初法道仙住給ひ其後權化の異人かはる〳〵錫を留めたまふ靈場かり然れども星うつり物かはりて石門岩徑苔封じて往來路絶たり歴應元年聞禪師此山に來り山峯の絶しきこと刀にて削るが如く岩窟の深きこと鑿にて穿がごとくなるを見て天竺の書閣窟山こそかくあらんと殊勝のれもひをかし此山に五百羅漢尊者を安置して末世の衆生に結緣をかさしめんと誓ひ麓に智剛寺といへる一小舍を結び先十六羅漢の繪像を安置して時を待給ふ延文五年逆流建願といへる和尚あり昭覺禪師をたづね來たりて倶に此山に登り昭覺禪師に語て日洞口西にむかひ石橋北に横り恰も天竺の書閣窟山に似たり汝と志を同して五百羅漢を建立せんと夫より建願和尚御手を下し給へば程に一歲のうちに三千七百有餘の佛菩薩その外四天王八大闍王等の靈活善神悉く彫刻し彩色せんと願ひ給へば土中より五色の繪の具涌きいで、微妙の莊嚴言の述べきにあらず延文六年十月朔日開眼供養をかし自ら出生入死一往一來朝遊東土暮歸天台といへる一偈を遺して淡土の天台山に歸り給ふ實に羅漢中の一尊からん永和二年赤馬ヶ關の者かりとて五男二婦人來り育王塔中の佛舍利とて率納して赤間ヶ關の海中に歸り失ぬとかり是又龍宮中の物からん其後細川武藏守頼之公黄金の舍利塔を寄附し婦人は水晶の寶壺を寄捨し並に家

り來りて浮圖を排へ五百羅漢千体地蔵等の像を造る士逆流の時に建仙願をなるに亦照覚をふて大りに石佛を刻す北帝光明帝恐元年始めて羅漢寺の洞百体堂三千石佛七の蔵造り巧人を造りて抄人を嘆せしむ（中津歴史）

羅漢寺の二十四景

耶馬溪に遊ぶ　頼山陽翁

に寄敬し給ふ舎利二八顆を同じ寶壺に奉納して此山の重寶とおせり昭雲禪師は此山を守せんと誓ひて至德元年九月十一日岩を穿ちて入定し給ふ此山の殊勝なる時の將軍足利義滿公の上聞に達し自ら御筆を染め給ひて書院寫山羅漢寺といへる額字を寄附し給ふ故に今に至る迄院號太上天皇といへる尊牌を安置して此山の開基と仰ぎ來れり山中に廿四景あり其中に甘露泉微妙花は不思議といはんも宜なりこゝに萬が一を記し略縁起と名くくわしきことは本縁起にしるせり

再住寛江代

二十四景

飛來峰　天人橋　伏虎巖　達磨瀧　寒山巖　逍遙館
石橋　普濟樓　微妙花　香雲閣　無漏窟　蟠龍洞
高源水　鳳臨亭　摩尼殿　石爛室　華鯨樓　雞足塔
指月巒　仙巖　拈華頂　華壁磴　金剛關　降龍川

予が友廣池西海、曾て中津歴史を編纂し、一本を送る、書中、山陽翁、耶馬溪に遊ぶの事を記するものあり、序事簡明にして頗ぶる當時の景狀を知るに足る者あり、因て一章を左に拔記す、

文政元年十二月安藝廣島の鴻儒頼山陽中津に來る、始山陽此歳を以て九州に遊ぶ既に二肥薩隅を經是に至て日田より山國谷を過ぎ古城に來りて正行寺の院家末弘雲華を訪ふ山陽頗る山國谷の山水を賞し雲華を見るに及びて未寒暄を叙べす行李を擲て大息して日嗚呼耶馬溪なる哉と雲華曰く我豐州の山水奚ぞ止

に此一溪のみならんや若更に羅漢を見ば則子が魂飛び魄銷はれんのみと乃ち相共に馬に遊ぶ羅漢の地たるや四圍雲壁天に連り苔巖逸石起伏して洞（西石佛共に施工其精を極め世に稱して奇勝とおす山陽觀て樂まず恨然として嘆して曰嗚呼此醜山徒に予が眼孔を傷くるのみと雲華曰雲根百丈君が面前參列す何相罵るの甚しきやと山陽が曰師未だ山を稱するの秘を會せざるか凡山水は必ず樹木人家流水の三あるを要す若此三者其一を欠く時は則山貧にして潤はず水窮りて活きず殘山剩水の僻境たるに過きざるのみ今此羅漢は人工を以て天眞を傷く山剝けて水死す奇形ありと雖も復觀るに足るものなし該を耶馬に比するときは雲壤も啻おらず嗚呼耶馬溪両面の山水凡一百里千巖競ひ秀で、幾樹巒蔽し水は以て漁舸を泛ふべく山は以て采樵に充つべく而して十有三村山を負ひ水に沿ひ田園羅落道路橋梁其間を點綴し稼穡行旅の來往絡繹として絶へず仰て峯巒を望めば則峻巖天に攢り俯して溪流を瞰めば則紺碧地に馳せ峯乳丹を吐き金氣蒸を現はす巖間撞て水芳しく翠苔稠くして石肥へ佛閣神祠叢松の杪に起伏し野店驛舍深菁の間に隱見す加之山竅の妙千狀萬態多々盡變して更に端倪すべからす蓋造物者の活畫おりと雲華悟る處あり是に於て又同く耶馬溪に遊ぶ山陽自其實景を圖し文を作りて之を記し詩數首を賦して以て雲華に送る其一に云「一瞥屏顔未免憎今遊眉目始分明賞心不負平生淚耶馬溪頭向度行」其二に云「峯容面々趁看殊耶馬溪山天下無安得彩毫如薑巨生絹一丈作橫圖」と始茲地山國谷と稱せしが山陽改めて耶馬溪とおす蓋「耶馬」「山」と因音相同しきを以て也是より耶馬溪の名海内に布き今や内外の士人足を九州に入るゝものは必ず一び此地に遊びて其勝を探らざる者おきに至れり云々

○

菅茶山翁の「筆のすさみ」（安政四年の出版）には、豐後山國川と區して左の如く、記されたり、

豐後日田より豐前中津へ二十里計、みな峽中なり、川を山國川といふ、左右の峯巒、樹石、奇姿妙態をきは

菅茶山の隨筆

めて、道も平らかなり、千里を遠とせずして往遊するも、所謂一來を拒げざるかりといふ、云々

(二) 孝謙天皇の朝、和氣ノ清麿、神託を奉じて、皇運を一髮の危に守護し奉たる官幣大社、宇佐八幡宮は、北ノ方十二里を距たる、宇佐郡宇佐町に在、

官幣大社宇佐神宮は豐前ノ國宇佐郡宇佐町字龜山に鎮座す、本殿三宇、何れも南面にして建物、鳥居、境内に立列り、石壇瑞石參道を裝ひ、林樹、池水、風致を爲し、攝社、末社、當地の内外に鎮座し、名所、舊跡、神境の東西に散在して、頗る盛大の社頭なり、

一の御殿は應神天皇の御靈を祀り、二の御殿は比賣大神を祀り、三の御殿は神功皇后の御靈を祀りたるなり（宇佐神宮案内記）

(三) 布引を廿（ハタチ）はかりに重ぬとも麓にならめ」と近衛信尹（ノブタダ）公の詠せられたる陀堕の瀧は、南の方十五里を隔てたる大野郡大野村に在

沈堕瀑ノ記云、豐後國大野郡有レ瀑、號沈堕、傍有二兩淵一、曰二男淵一、曰二女淵一、即男瀑女瀑所二流積一也、云々石川丈山の詩に云

条樹一派掛長虹。亂溜放浸煙霧中。欲自銀河波底出。白龍倒下碧雲宮。
竦傑巖涯不測泗。驚湍急瀉眼如眩。高源漲飛氷雪。高聳千雷吼珊川。

此二首丈山の瀑布を詠ずるの詩なり

飛流如雪又如虹。人骨清冷一望中。高直明々奇絶處。却疑素練落天宮。
飛瀑落來沈堕淵。淵深殿閣忽爲眩。古今此處號男女。盟久千年山與川。

（俗說辨卅四）

(四) 三重内山の觀世音、炭燒小五郎の遺跡は南の方十四里を距てたる大野郡三重村字内山に在り

大野郡三重に眞名野長者と云者あり家甚だ富かり常て黄金三萬兩を天台山に寄贈し以て福を祈る南嶽慧照大師之を聞き百濟の僧逆城を遣し觀音菩薩の佛像を獻し長者の宅に至る長者大に悅び逆城を敬信す時に敏達天皇二年六月なり云々（豐後遺事）

予曾て小五郎の事跡として俗間傳ふる所の諸說を採り以て一部の小史を編む當時其首に辨するの文左の如し

三重内山黄金之炭竈自序

小五郎之事久矣戲稽以無可以考者焉、雖然我南豐之俗、古來多傳之者、其尤膾炙於人口、至如五郎之西岱玉媛西下之事、收童菊女、至今尚能談焉、今茲四月、予以事赴大野郡三重村、遂抵于内山、突逆城寺、即是爲小五郎之遺蹟、寺頂山泉水、實成深蹇、四隣閑廟、眞知爲一塊之靈區、時方暮春、落紅滿地、新苔沒階、悲慕之餘壁、惜春之鳥音、亦自足使人發塵俗解脱之念、寺僧迎予慇々款待、導出庭上、指寺背一嶺、謂曰、嶺上有五郎炭竈之古址、距今三十年前、土民穿址中、獲當日所燒之遺炭云、又去至一水之畔、謂

田能の千町蕪田

桐原の老櫻樹

日是稱金龜之淵、往昔黄金之龜、由泛於此水面也、其他既故事、娓々不絶口、雖似有可聽者、事既屬千有餘年之遠則所既不足盡信也、驗鉄地既名内山、山亦存姫見岳之稱、則事稍有足存考古之疑者、予歸家后、戚據世俗之所傳、倒紫補疎、以作一篇之小史、題爲三重内山黄金之炭竈、所羞蠟非無荒唐之嫌、故不改竄、看官幸諒焉、時在明治庚寅仲夏、

鶴谷外史識

(五) 朝日長者の遺趾として千古の奇觀を存したる田能の千町蕪田は

西の方十二里を距てたる玖珠郡田能村に在

玖珠郡飯田村字田野と云へる地に千町蕪田と呼べる所あり、山間に平遠の廣野ありて芦荻薄芒の類、生ひ茂り地面に水氣多く、秋の半に至れば何れも其花色々に咲分けて、穂に出づるさま、恰ども早稻、晩稻の別あるに似たり、地面の長さ凡そ二里にも亘りぬべく狹き所は一里ばかもありぬべし、傳云古昔此地朝日の長者といふ者あり、多く水田を有して富豪並ぶもの無かりしも子孫驕奢を極めて正月の遊嬉戯に餅を作り、之を的として射たるに其餅白鳥に化し飛去りたりと爾後子孫斷絶して水田も荒蕪に歸し今の千町蕪田は此の長者の遺跡なりといふ

(六) 千載の老樹雲に聳へて花光數里を照らす桐原の櫻は南の方十九里を隔てたる南海部郡堅田村字黑澤に在

南豐温泉記畢

明治二十九年六月十五日印刷
仝　二十九年六月二十日出版

定價　定價二十五銭

編輯者　大分縣豐後國大分郡大分町八百七十六番地　佐藤藏太郎

發行者　大分縣豐後國大分郡大分町八百六十六番地　甲斐治平

印刷者　大阪市南區鰻谷仲之丁五十三番屋敷　岡島幸次郎

版權所有

19
288

026277-000-1

19-288

南豊温泉記

佐藤　蔵太郎／著

M29

ADC-4037